主は、生きておられる

Unser HERR lebt

2012 graph magazine vol.24

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol.24



メッセージ

4 主のみ声を聞く必要性　ゴットホルド・ベック

連載第5回

22 神と共に歩む人生　ヴィルヘルム・ブッシュ

6人の証し

44 主のあわれみは尽きない　井上真智子

54 わたしは背負う　戸高真美子

60 わたしはあなたを捨てない　渡辺ゆきみ

68 その愛とあわれみによって　宮城昭代

76 若い日に、あなたの創造者を覚えよ　長岡健次

86 ご真実なるイエス様　長岡伊津子

94 キリスト集会へのご案内

96 集会の出版物

主のみ声を聞く必要性

ゴットホルド・ベック

わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。しかしわが民は、わたしの声を聞かず、イスラエルは、わたしに従わなかった。それでわたしは、彼らをかたくなな心のままに任せ、自分たちのおもんぱかりのままに歩かせた。ああ、ただ、わが民がわたしに聞き従い、イスラエルが、わたしの道を歩いたのだったら。わたしはただちに、彼らの敵を征服し、彼らの仇に、わたしの手を向けたのに。

（詩篇　81・10〜14）

そのうちに主が来られ、そばに立って、これまでと同じように、「サムエル。サムエル。」と呼ばれた。サムエルは、「お話しください。しもべは聞いております。」と申し上げた。

（1サムエル　3・10）

人間はみな耳を持っています。しかし耳があっても聞こえず、また聞こうとしなければ悲劇的なことになります。主のみ声を聞くことの大切さについてここで考えてみたいと思います。

過去を振り返ってみると、一番素晴らしいのは、疑いもなく、主のみ声を聞いたことです。主のみ声を聞いたことは、私たちにとって忘れることのできない事実です。そして今も、私たちの心の奥底にある強い願いは、イエス様のみ声を聞いて、イエス様と交わりを持ちたいというものではないでしょうか。

人生においてどうしても必要なことは主のみ声を聞くことです。主のみ声を聞くときに、私たちは心配から解放され、悩みながら喜ぶようになり、満たされるのです。では、主のみ声とはいったいどういう声なのでしょうか。

その第一、主のみ声は大水のように力強い声です。

その足は、炉で精練されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。…それで私は、この方を見たとき、その足もとに倒れて死者のようになった。しかし彼は右手を私の上に置いてこう言われた。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。」

（黙示　1・15、17〜18）

ヨハネはこの大水の音のような声を聞いたとき、主の足元に倒れて死人のようになりました。主のみ声は、人間の声よりもはるかに力強いものです。

私たちは人間の声を聞いて、しばしばがっかりしたり、打ちのめされたような気持になったりします。また、多くの人が賞賛のことばや批判によって動かされていることも事実です。ある生徒は「あなたの人生はダメになる」と先生に言われ、自殺を図ってしまいました。確かに、人間の声は大きな影響力を持っています。また外側の声だけではなく、自分の心の中の声も力を持っています。

人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。

（創世記　8・21）

またエレミヤも二千六百年前に書いたのです。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。

（エレミヤ　17・9）

彼らは、神を知っていると口では言いますが、行ないでは否定しています。実に忌まわしく、不従順で、どん

な良いわざにも不適格です。（テトス　1・16）

人間の思いは主の思いとは違った方向に向いています。ですから、自分自身の心の声を大切にすると、知らないうちに神のみ旨から遠ざかり、悪魔の罠（わな）に陥ってしまいます。

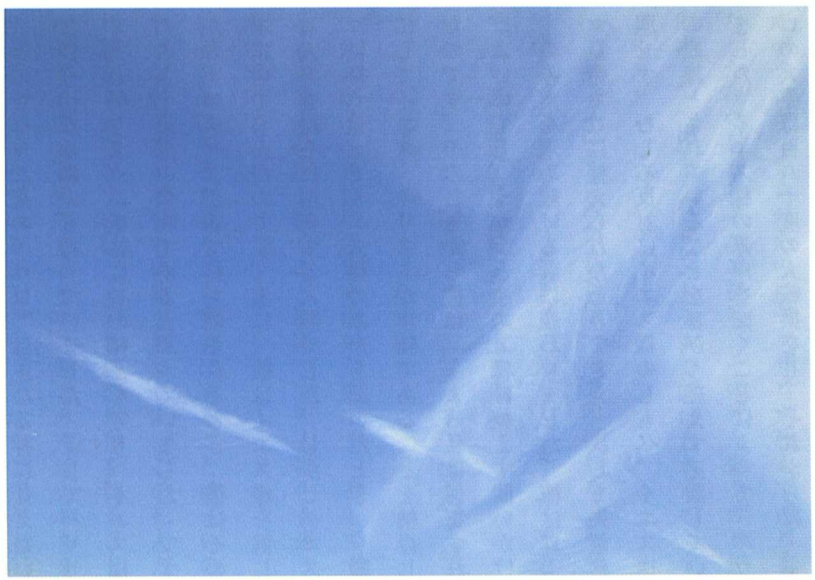
かつてイエス様が弟子たちに、ご自分が十字架につかねばならないことを公にされたとき、ペテロはそれを止めようとしました。聖書を見てみましょう。

イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。・・・その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」（マタイ　16・15〜17、21〜22）

「あなたは生ける神の子キリストです」と主に対する信仰を示したペテロは、別の瞬間には自分の心の声に負けてしまいました。ですがイエス様はペテロに向かって、「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」（マタイ　16・23）と叱責されなければなりませんでした。

他人の声や自分の心の声だけではなく、「悪魔の声」も私たちの働きを妨げようとします。悪魔の目的は、私たち人間がいつも自分のことばかり考え、自己決定や自己支配に陥るように導くことです。悪魔がこの目的を達成すると、もはや人間はイエス様のみ声を聞くことができなくなります。

他人の声に動かされず、自分の心の声を否定し、また悪魔の声に対して耳を塞ぐ人だけが、主のみ声を聞くことができ、その偉大さ、すばらしさを体験することができます。反対に、主イエス様のみ声の代わりに他人の声を大切にするとき、決して良い結果とはなりません。またイエス様の霊によってではなく、自分の心の声によって動かされる人も本当に惨めです。またみことばの上に立たないで、悪魔のささやきに耳を貸し、それに従う人は道を誤り、だまされてしまいます。イエス様のみ声を大水の音のように聞き、イエス様のみ声を他の声よりも大切にする人は幸いです。そのときにのみ、私たちは奇跡を経験することができるのです。



第二に、イエス様のみ声は「人を納得させる力」を持っています。

そのよい例は、当時サウロと呼ばれていたパウロの回心に見られます。聖書を見てみましょう。

さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、大祭司のところに行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞いた。彼が、「主よ。あなたはどなたですか。」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」（使徒　9・1～5）

このサウロ（後のパウロ）は主なる神に仕えたい、という切なる願いを持っていました。そしてパリサイ人と同じように厳格に神の律法を守り、イエス様のことを最悪の偽物であると思っていました。ですから、ステパノが石で打ち殺されるとき、彼はその場にいて喜んだのです。実に、彼はイエス様を信じる人々を熱心に迫害する人間でした。しかしダマスコに行く途上でイエス様のみ声を聞いたとき、一瞬にしてイエス・キリストが本物であることを納得したのです。そのときから彼は「主よ、私は何をすればよいのでしょうか」とイエス様に絶えず問いかけ、主のみ声を求め続ける者に変わりました。彼はローマ皇帝ネロに捕えられたときでさえ、決して失望落胆せず、むしろ反対にイエス様のしもべ、イエス様の奴隷とされていることを喜び、絶えず感謝していました。イエス様のみ声を聞くことによって、パウロの人生は百八十度の大転換をし、それからは、主のみ声を聞くことが、絶えず喜んで感謝できる秘訣となったのです。

パウロと同じように、「主よ、私は何をしたらよいのでしょうか、どうぞ御心を明らかにしてください。しもべに語ってください」と祈ることのできる人は本当に幸いです。

主イエス様のみ声は第三に、いのちを与えます。

聖書に、ベタニヤという小さな町に住むマルタ、マリヤ、ラザロの三人兄姉のことが書かれています。イエス様はよく彼らのところに立ち寄って、すばらしい交わりを持っていました。彼らにとって主イエス様のみ声を聞くことは最大の喜びでした。ところがある日、彼らはラザロの死という大きな悲しみに見舞われることになりました。知らせを受けたイエス様がベタニヤへ来られたのは、ラザロが死んで四日もたった後でした。イエス様は、その死んだラザロに向かって「出て来なさい」と大声で呼ばわれたのです。

イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。（ヨハネ　11・43～44）

死人がイエス様のみ声を聞いたのです。そして、イエス様のみ声を聞くことによって死人は生き返ったのです。

義務的に聖書を読んだり集会に来ることは、いのちのない、死んだ行いに他なりません。この死んだ状態から抜け出すには、イエス様のみ声を聞くことがどうしても必要です。イエス様のみ声はいのちを与える力を持っているからです。それまで死が支配

していたところであっても、主イエス様のみ声を聞くことによっていのちが生まれるのです。

イエス様のみ声は第四に「招きの声」です。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ 11・28）

苦労している人は解放されるべきであり、重荷を負っている人は休むべきです。こんにち世の中には想像することもできないほど、重荷となるものが満ち満ちています。信仰を持つ人々でさえ、もはや本当の喜びを見出すことが難しくなっています。聖霊の導きに対して心をかたくなにしてしまう信仰者も少なくありません。主イエス様以外に、楽しみを求めようとしている信仰者もいます。私たちが意識して悪魔との関係を断ち切らない限り、私たちは悪魔の手玉にとられてしまいます。

現在、イエス様との関係がどうであれ、あなたの悩みと苦しみがどのようなものであれ、イエス様はあなたを招いておられます。あなたは苦痛、心配、不安、動揺のうちにいるのではないでしょうか。イエス様は「わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」と言っておられます。

あなたは不幸、不満、不自由を感じているのではありませんか。あなたの心には喜びがあるでしょうか。主イエス様は「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです」（ヨハネ 16・33）と言っておられます。

あなたが自分の弱点や自分の力ではどうにもできないことで、いつも試みられて失望しているのなら、イエス様のみ声を聞いてください。イエス様は「わたしのもとに来なさい、わたしに呼び求めなさい、あなたはわたしのうちにあってすべてのことにおいて、勝ち得て余りある者となる」とおっしゃっています。

あなたの心の中には、今まで誰も満たすことができなかった癒しがたい飢え渇きがあるのではないでしょうか。イエス様は「わたしはいのちのパンです。わたしに来る者は、もはや飢えることがない」と約束してくださいました。

あなたの魂にはどんな医者にも治せないような、カラカラに乾いた土地のような渇きがあるのではないでしょうか。イエス様は「誰でも渇く者はわたしのところに来て、飲みなさい」と呼んでおられます。

イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません。」（ヨハネ 6・35）

あなたの一日は失望と誘惑と試練に満ちていて、あなたの目の前には真っ暗な闇が広がってはいないでしょうか。イエス様は「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つ」（ヨハネ 8・12）と約束しておられます。

あなたはご自分の魂が罪で汚れているのに驚き、こんな魂が本当にきよめられるのだろうかと疑ってはいないでしょうか。主は、わたしのところにすぐ来なさい、私に呼び求めなさい、「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる」（イザヤ 1・18）と言っておられます。主のみ声はいつも、あなたを招いておられるのです。

イエス様のみ声は第五に「慰めを与える」声です。

イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」…イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」

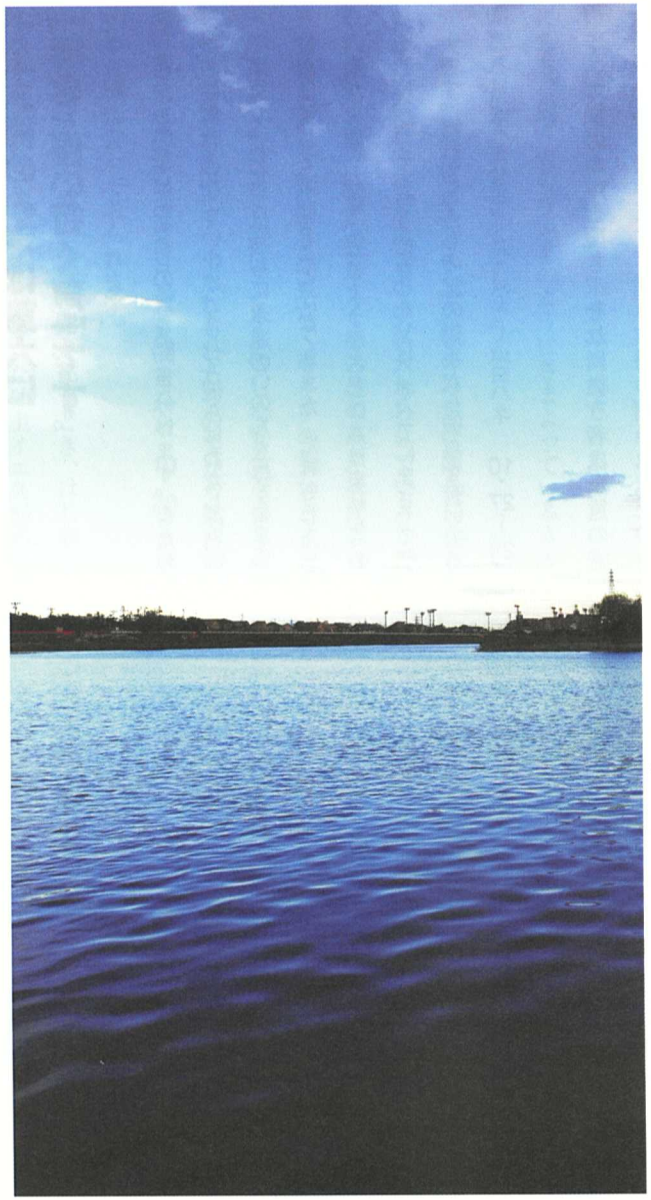
（ヨハネ　11・23、25～26）

イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」…そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。彼の顔は布切れで包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」そこで、マリヤのところに来ていて、イエスがなさったことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた。

（ヨハネ　11・40、43～45）

このとき、マルタとマリヤは兄弟ラザロの死を深く悲しんでいました。ラザロは死んでから四日もたっていたため、その死体はすでに腐っていて、まったく望みのない状態になっていました。

しかし、このような絶望的な状態の中に、イエス様のみ声が聞こえて来ました。「わたしは、よみがえりです」。人間の目には絶望的に見え、どうすることもできないような状態にあっても、イエス様のみ声は慰めと逃れ道を与えてくださいます。私たちがどのような者であるかが大切なのではなく、主イエス様がいかなるお方であるかということ、すなわち、イエス様が「よみがえりのいのち」であるという事実が、最も大切なのです。「わたしはよみがえりであり、あなたのいのちである」というイエス様のみことばは、なんという慰めを与えてくれることでしょう。自分が駄目な者だと知って落ち込んでいる人、失望、落胆、絶望した人にとって、ただ一つの逃れ道はイエス様のみ声を聞くことです。



主のみ声を聞く必要性

イエス様のみ声は第六に「導き、伴い行く声」です。

わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。（ヨハネ　10・27～29）

イエス様のみ声を聞き、それに従う者は永遠の安全保障を持っています。イエス様の願いは私たちを導き、伴い行くことです。主イエス様は決して私たちを奴隷のように束縛することを望まず、私たちの本当の幸せを願っておられます。

また、（イエスは）群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかわいそうに思われた。（マタイ　9・36）

「羊飼いのない羊」とはどんな羊でしょうか。飼って養ってくれる者がいない羊です。

わたしの民は、迷った羊の群れであった。その牧者が彼らを迷わせ、山々へ連れ去った。彼らは山から丘へと行き巡って、休み場も忘れてしまった。…イスラエルは雄獅子に散らされた羊。（エレミヤ　50・6、17）

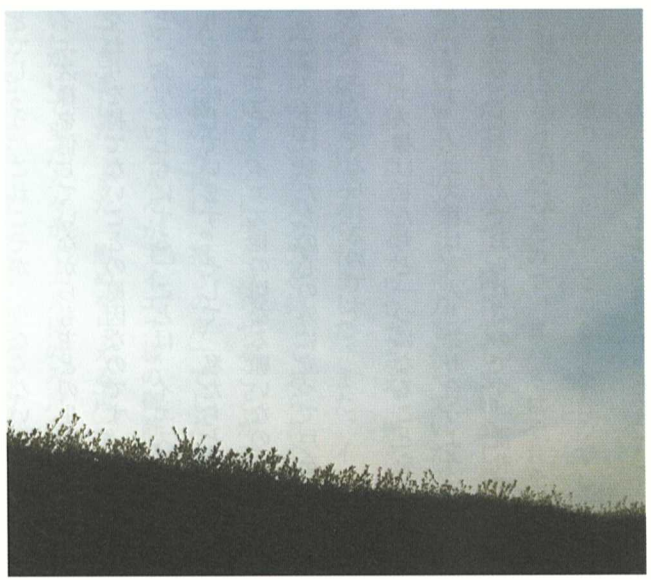
飼う者のない羊には休むところがありません。飼う者のない羊は獅子に追われて散らされた、さまよう羊です。

わたしの羊はすべての山々やすべての高い丘をさまよい、わたしの羊は地の全面に散らされた。尋ねる者もなく、捜す者もない。（エゼキエル　34・6）

飼う者のない羊とは、誰も捜してくれる者のいない羊です。この羊は弱り果てて倒れています。こんにちも、飼う者のない羊のようにさまよっている人々がなんと大勢いることでしょうか。

一方、羊飼いであるイエス様のみ声に聞き従うということは、完全な導きの中に入れられていることを意味します。ですから、イエス様のみ声に聞き従う人は、散らされ弱り果てた、導き手のないさまよう羊のようではなく、はっきりとした安全な導き手を持っているのです。「だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません」（ヨハネ　10・28）と主イエス様は言っておられます。

私たちはイエス様のみ声に聞き従うとき、はじめて本当の満足が与えられます。あなたは主イエス様のみ声に聞き従い、イエス様に導いていただこうとしているでしょうか。それとも人の声や悪魔の声に従って、自分勝手に自分の道を歩もうとしているのでしょうか。



イエス様のみ声は第七に「願っている声」です。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。（黙示　3・20）

イエス様は、戸を叩いていると言っておられます。イエス様はいつも、さまよう人の心の戸を叩いておられ、み声を聞いて心の戸を開けることを願っておられます。しかしイエス様は、ただ単に未信者の心の戸を叩いて、その人がイエス様のみ声を聞くように願っておられるだけではなく、「信ずる者」の心の戸も叩いておられます。

イエス様を「主」とし、「主」にすべての支配権をゆだねる用意のできている信仰者は何と少ないことでしょう。これこそが、少なくない数の人々が、イエス様を信じていながらも主との生き生きとした交わりを持てないことの原因なのです。主イエス様と「食事をともにする」ことは、イエス様との交わりを意味しています。そして、私たちと交わりを持つことこそ、イエス様の切なる願いなのです。だからこそ、主は私たちの心の外に立って戸を叩き、私たちを呼んでおられるのです。

主イエス様は私たちと一つになることを望んでおられます。イエス様は友人と語り合うように私たちと語ることを望んでおられるのです。洗礼者ヨハネの証言を見ましょう。

花嫁を迎える者は花婿です。そこにいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです。あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。（ヨハネ　3・29〜30）

主イエス様の友ヨハネは、イエス様のみ声を聞いて喜び、満ち足りたのです。ですから本当に満ち足りて喜びたいと思う人は、イエス様のみ声を聞くべきです。ヨハネと同じように、イエス様だけが栄えることを切に望み、そのためにはどのような犠牲も払う覚悟を持ち、その結果自分が衰えることもいとわないという人こそ、完全な満足を得ることができるのです。

主イエス様との親密で深い交わりは、私たちが主の前にいて光の中を歩むとき、すなわち隠された罪がなくなったときにはじめて与えられるものです。主イエス様との交わりは、私たちが百パーセント、イエス様により頼み、すべてを主にゆだね、明け渡したときに成就されるのです。

主イエス様との交わりは、主イエス様と一体になることに他なりません。これこそがイエス様が切に望んでおられることですが、私たちはいったい何を求めているのでしょうか。私たちもまた主のみ声を聞いて、主との交わりに入りたいと心からの願いを持っているならば幸いです。

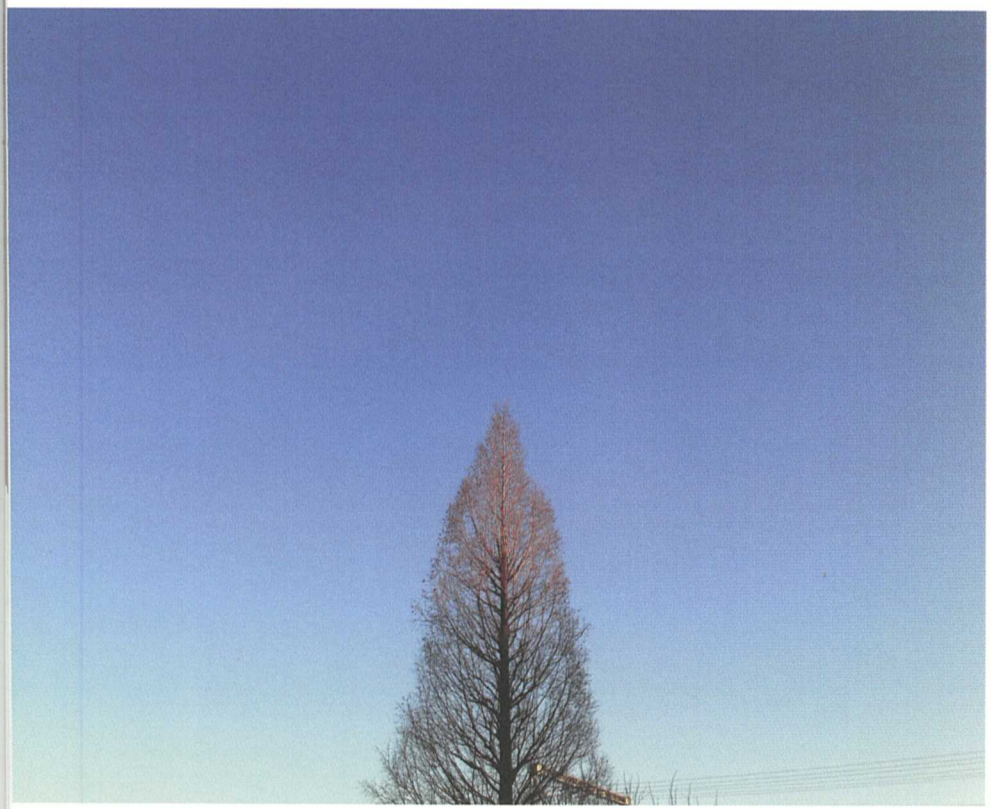
イエス様のみ声とは、どのようなものでしょうか。あまりにも力強かったので、ヨハネはそれを聞いたとき死んだようになって倒れてしまいました。そのみ声は疑いようのない説得力を持っていたので、猛（たけ）り狂った迫害者サウロでさえ、燃えるように熱心な証し人に変えられました。また、イエス様のみ声はいのちを与える力を持っておられたので、死んだラザロをすぐに生き返らせることができました。

イエス様のみ声は「招きの声」でしたから、多くの苦しんでいる人々が主イエス様の御許で憩うことができました。また「慰めを与える声」でしたから、押しかけて来た人々がイエス様のみ声を聞いて生きる望みを与えられました。イエス様のみ声は「導く

声」でもあったので、さまよう人々が主イエス様のみ声によって父のもとに立ち返り、本当の満足を見出すことができました。イエス様のみ声は「願う声」でもありましたから、さまざまな人々が主イエス様を単に「救い主」としてだけでなく「主」として受け入れ、本当の心の満足を得たのです。

今も、主イエス様は変わることのない、当時と同じお方です。イエス様のみ声も昔と異なるところがありません。イエス様のみ声を心から聞こうとすれば、そのみ声は他の何ものよりも強いものであることがわかります。いのちを与えるイエス様のみ声は、あなたの生活を満ち足らせようと願っておられます。また、招いておられるイエス様のみ声は、重荷を負って苦しんでいる人々を解放し、完全な安らぎと憩いとを与えてくださるものです。

万物をお造りになった主は、私たちとの生き生きとした交わりを望み、願っておられます。私たちは主のみ声に聞き従う覚悟ができているでしょうか。それとも自分の心の声や他人の声、さらには悪魔のささやきが渦巻いている状態にとどまろうとしているのでしょうか。主イエス様のみ声に聞き従うただ一つの道は、「自分が衰えて主イエス様が栄えることを望む」心構えです。この心構えを私たち一人ひとりが持つときにはじめて、主イエス様は私たちと一つになってくださるのです。



神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ
（8回連載、第5回）

第五章　罪を負ったままで、人生を生き通せるか

この章のテーマは「罪の重荷」です。このテーマこそ、もっと真剣に、私たちが考えなければならない問題です。罪と、それによって生じる神への負い目、呵責、債務、わかりやすく言えば「罪の重荷」は、意識しようとしまいと、神を信じない人々につきまとって離れることはありません。

この章で、人生を幸せに豊かにしてくださる神の大きな贈り物についてお伝えできるのは、私の大きな喜びです。その神の贈り物は地上のどこにもなく、どんなにたくさんのお金を払っても買えません。またそれは、誰かに頼んで手に入れることができるようなものでもありません。その神の贈り物とは、「罪の赦し」です。恐らく多くの方々は「え、何かと思ったら『罪の赦し』だって?」と、がっかりされたのではないでしょうか。



どうして私に「罪の赦し」が必要なのか

「罪の赦し?そんなものはいらないね」。多くの方々はそう思われるでしょう。最近、ある若者が私に面白いことを言いました。「僕たちは広告に踊らされて生きているんだよ。おじいさんやおばあさんたちは、きっと有名なガムやお菓子の名前なんか知らなかったと思う。でも僕たちの時代には、テレビやラジオの宣伝で『このガムやお菓子がないと絶対ダメだ』って思い込まされているんだ。大会社の宣伝で『自分にはこれが必要だ』と思い込まされて、人々はいらない物を買わされているんだよ」。そしてその若者は、続けて私にこう言ったのです。「教会もこれと同じじゃないの。『あなたたちには罪の赦しが必要です』なんて言って、何かを売りつけようとしているんでしょう。本当は、僕たちにはそんなものまったくいらないのに、必要みたいに思わせようとしているだけじゃないんですか?」

ある時、私は道を歩いている人を呼び留めて、「こんにちは。あなたのお名前は?」と尋ねました。「マイヤーだけど?」。そこで私が「マイヤーさん、あなたには『罪の赦し』が必要ですね」と言うと、彼は答えました。「ばかばかしい。私に今必要なのは『罪の赦し』なんかじゃない。二千マルクだよ」

しかし本当に、私は聖書の言葉を、何の必要もないのに宣伝して無理強いしているのでしょうか。それはまったくの誤解です。あなたがどのようにお考えかは知りませんが、この「罪の赦し」ほど、私たちが必要としているものは他にないのです。

「罪の赦し」などいらない、という人は、至高にして恐るべき神の存在を知らないのです。神については、その愛の側面だけが多く語られ過ぎたせいで、神が一方では聖書に書いてある通り、真に恐れるべ

きお方であることがよく知られていないのです。私自身、罪の人生から目覚めた時、それまでなおざりにしていた「神に対する恐れ」を持つ必要を痛感したのです。

「罪の赦し」などいらないという人は、生ける神が、あなたの身も心も、罪を償うために永遠にゲヘナ（地獄）に投げ込むことができるお方である、ということを知らないのです。もし世界中のすべての人がその恐ろしさを知らず、また信じようとしないならば、私たち人間は一人残らず失われてしまうのです。イエス様は、人が失われていくことに対して、はっきりと警告しておられます。私たちは自分自身の罪を抱えていながら、「罪の赦し」などいらない、などと平気で言える存在ではありません。「罪の赦し」ほど必要なものは他にないのです。

その昔、私は美しいチューリッヒの町で講演会を開きました。会場は満員で、大勢の人々が壁ぎわに立っていました。その中に、楽しそうに話し合っている二人の男性がおりました。おそらく彼らは好奇心から参加していたのでしょう。私が話し始めると、二人とも興味深そうに聞き入っていました。そして私が「罪の赦し」という言葉を初めて口にした時、片方の人がもう一人に囁（ささや）きかけました。彼らが何を言ったのかは遠くて聞こえませんでしたが、その様子で何を言っているか、すぐにわかりました。「あーあ、『罪の赦し』だってさ。また、牧師さんのいつもの話だぜ」。そして「僕は別に犯罪者ではないんだから、『罪の赦し』なんかいらないよ」とでも言っていたのでしょう。

そこで私は付け加えました。「今から三十秒のうちに、私の質問に『はい』か『いいえ』かのどちらかで答えてください。あなたはこれから永遠に、『罪の赦し』を拒否し続けますか?」。およそ千人くらいの参加者は、三十秒間、沈黙しました。そしてその時、先ほどの二人の男性も非常に驚き、困惑した表情を見せたのです。

私たちはいわゆる犯罪者ではありませんが、死を目前にした時には、やはり神に「罪の赦し」を乞うのではないでしょうか。私たちはいつまでも「罪の赦し」を拒否し続けることができるでしょうか。あなたご自身はいかがですか。

「私は正しい。だから誰も、何も怖くなんかない」という人がいます。しかし、十歳以下の子どもの口からはそのような言葉は出てきません。人間は子どもの時から、すでにいろいろな罪の呵責を負っているのです。ですから「私は正しい」などと口にできるのは、もはやその人の心に良心らしい良心がなくなっていることを暴露しているのです。言い換えれば、その人の中では良心が衰えて、心の動脈硬化が始まっているのです。もしも良心が健全であれば、私たちには「罪の赦し」が必要だ、ということがはっきりとわかるはずです。

何年か前のことですが、エッセンという町で、ビル・ヘイリーというロックンロール歌手がバンドを連れてきてコンサートを開いたことがあります。そこに集まった数千人の若者たちは、最初は静かに音楽を聞いていたのですが、次第に興奮して荒れ狂い、皆でその会場を壊し始めたのです。それは実にひどい壊し方で、損害は甚大でした。その大荒れのコンサートの翌日、私が町を歩いていると、いかにも前の晩にそのコンサートに参加したと思われる若者と出会いました。私は彼に話しかけて、どうして会場を壊したのか、その理由を尋ねてみました。すると、彼は言いました。「ああ、あれ?みんな、絶望し切っているのさ」。「一体、何に絶望しているの?」と聞きますと、「いや、実はそれが俺たちにもよくわからないんだ」

デンマークの偉大な神学者であり哲学者であるキェ

ルケゴールは、自伝の中でこう語っています。ある日父親と一緒に散歩した時、父親は急に立ち止まって彼をしげしげと見つめ、言いました。「そうか。お前は静かな絶望の中で生きているんだな」と。それを読んだ時、私は四十年間牧師をしている者として、「この表現不可能な虚無感、絶望感は、誰もが持っている」と思いました。

この問題を、あなたにもお聞きしたいのです。あなたはこのような絶望をご自分の人生で体験したことがありますか。あるとすれば、その絶望感が一体どこから出てきたのか、私たち自身の心の中を探る旅に出かけましょう。

私はかつて鉱山で牧師をしていた時、よく坑道に下りていきました。作業着を着てヘルメットをかぶり、心細い昇降機で深い坑道へと下りていくのです。最下層は水が溜まっているので、通常、昇降機は手前の階までしか行きません。でも一度だけ昇降機の鋼索が切れて、最下層の水溜まりに転落したことがありました。恐ろしい体験でした。その時以来、私は、「鉱山の最下層には汚れた水が溜まっている。その汚水は、人の心の最深部に淀んでいるものと同じではないか」と思うようになりました。

私たちの心の奥には、何層もの深い坑道が錯綜しているのではないでしょうか。たとえば見かけは喜んでいても、心の奥はまったく違った思いが占めている、表面は笑っていても本心は死ぬほど辛い、というようなことがあり得ます。外面上問題がなく幸せで、人生を謳歌しているように見える人々でも、実は心の奥底では絶望にうめいている、ということがあり得るのです。心理学者や精神科医はこのようなことを経験でよく知っています。

そして、心の奥底にある絶望感と恐怖心は、時には心の表面にまで上がってきます。ある精神科医が話してくれたのですが、今、どこの診療所も大勢の

若者たちで溢（あふ）れています。その若者たちは絶望感や恐怖心がどこからきているのかをよく知ろうとしないで、ただそれらが取り除かれることだけを期待します。その方法は薬物療法です。精神科を訪れるのはまだいいほうで、中には安易に麻薬に手を出す若者も多いのです。薬物や麻薬によって簡単に忘れることができると考えるより、問題に真正面から向き合って、何が不安で、何が絶望の源なのかをしっかりと見定めた方が賢明だと思いませんか。

人の心の最深部に深い絶望が巣食っている、ということは、精神医学の分野で最近問題にされ始めたそうです。しかし聖書はすでに三千年前に次のように言っています。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。
（エレミヤ　17・9）

人が持つ陰険な心について、その由来を、聖書は次のように説いています。「人は神に罪を犯してからというもの、神から遠く離れ、人間の本来あるべき姿からも離れて生きている。しかし、人は生ける神の裁きに対して心の底で大きな恐れを抱いている。だから私たちにはどうしても神が必要なのです」と。私たちの心が絶望に打ちひしがれる最大の理由は、神に対して持つ負い目、罪の呵責にあります。これこそが私たちの人生で最大の問題であり、自分自身ではどうにもできない問題です。私たちはそれに気づいているので深い絶望感を持つのです。罪の赦し、罪の負い目からの解放は人にはどうしても必要です。それは自明のことであり、何にも増して重要なことです。

ところで、罪とは何を意味しているのでしょうか。ひとことで言うと、「罪は神から離れている一切のこと」です。ですから、私たちは生まれた時からす

でに罪人なのです。

例をあげましょう。戦時中にイギリスで生まれた子どもたちは、ドイツ人に対して何の敵意も抱いていたわけではありません。でも、ともかく彼らは「敵の国に生まれた」のです。つまり、「この世」という神に敵対する場所で生まれた私たちは、生まれた時からすでに神から遠い存在として生を受けたのです。そして生まれた後、自分の周囲に罪の負い目の壁石を一つ、また一つと積み上げることによって、さらに神から離れた者になっていきます。その壁石はやがて城壁となり、罪は取り返しのつかない現実となってそびえていきます。

罪から離れることがいかに難しいものであるかを、私が初めて実感した時のことをお話します。私と父とはとても仲がよかったのです。ある日、私が屋根裏で試験勉強をしていた時、階下から父が私を呼びました。「町に出かけるから、いっしょに行かないか」。ところが試験勉強に夢中だった私は、この誘いを断ってしまいました。その二週間後、父は急死しました。父の遺体がわが家に戻ってきて、息子たちが傍に付き添いました。静かな夜で、皆は眠りについていました。私は父の傍にいて、二週間前に父の誘いを断ったことを思い出していました。私は父に語りかけました。「お父さん、もう一度、僕を誘ってよ。そしたらどんなに遠くても、お父さんが行きたい所に喜んでついていくから」。ちょっとした愛の欠如が永遠に取り返しのつかない結果となることを、私は骨身にしみて知らされました。それは、永遠に解決されない父親に対する罪の負い目となったのです。

あなたは人生の中で、意識する罪の負い目、意識しない罪の負い目がどれくらいあるか、考えてみたことがおありでしょうか。積み重ねてきた罪、愛の欠如による怠慢、わがまま、悪癖。それらに取り囲まれて私たちはどのように生きていけばいいのでしょうか。そうです。「罪の赦し」がなければ、私たちはこの人生を生きていくことはできないのです。

次に、死について考えてみましょう。「死ぬ時とは、いったいどのようなものだろう」と、私は何回も想像しました。死ぬ時、愛する人の手を握ることができるかもしれません。しかしその手も、いつかは離さなければならない瞬間がやってくるのです。

その時、私は完全な静寂の中を、自分の人生を背負って神の御前に進み出ていきます。すべての罪の負い目を携えて、聖なる神の御前に立つために。その時、すべての罪の負い目を負って立っていることの重みに気がついて、私たちは畏怖と驚愕の思いに圧倒されるのではないでしょうか。私たちには「罪の赦し」が必要です。それは日々の糧よりも、はるかに必要なものではないでしょうか。



罪の赦しはどこにあるのか

過去を清算する方法があるのでしょうか。あるとすればどのような方法でしょうか。私は先ほど父と町へ買い物に行かなかった思い出をお話ししましたが、その時の後悔は消えることがありません。私が自分自身の努力によって心の負い目を取り消すことは不可能なのです。このように、心の負い目、罪の負い目は神の前に残るのです。

聖書には、ユダという男が主イエス様を銀貨三十枚で裏切ったことが書いてあります。しかし彼は突然、自分が間違ったことをした、と気づいて後悔します。

そのとき、イエスを売ったユダは、イエスが罪に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を、祭司長、長老たちに返して、「私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして。」と言った。しかし、彼らは、「私たちの知ったことか。自分で始末することだ。」と言った。

（マタイ　27・3～4）

あなたが誰かに向かって「自分の罪を取り消したい」と言っても、戻ってくる答えは同じようなものでしょう。私たちの罪が清算され、なかったものとされる方法はあるのでしょうか。もしそれが可能だとすれば、一体どこにそのような「罪の赦し」があるのでしょうか。

聖書はこのことに明快な解答を与えています。旧約、新約の全巻を通して聖書が明言しているのは、「罪の赦し」があるということです。

ここで私といっしょにエルサレムの門をくぐり、ゴルゴタの丘のふもとに行ってみようではありませんか。民衆を見るのでなく、また十字架につけられた二人の犯罪人を見るのでもなく、周りにいるローマ兵を見るのでもなく、中央の十字架につけられたその方に目を向けてください。その方こそ、神のひとり子イエス・キリストです。ある時、イエス様は民衆に対し「あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか」（ヨハネ　8・46）と尋ねられました。しかし、それに答えて罪を責めることのできる者は一人もいませんでした。私たちの中でこのような質問のできる人、つまり自分に罪のない人は、誰一人としていないのです。

その後、イエス様は捕えられ、ローマの総督、ユダヤの祭司長、議会の高官たちの取り調べを受けました。しかしイエス様には何の罪も見いだすことができませんでした。イエス様は私たちと違って「罪の赦し」をまったく必要としない存在、神のひとり子だったのです。しかし今、イエス様はゴルゴタの丘で十字架にかけられました。

イエス様は、人の姿をとってはいますが人間ではありません。この世とは違う世界、つまり神の世界から私たちのところに降りてこられた方です。その神の御子であるイエス様が十字架にかけられたのです。いったいなぜ、どうしてでしょうか。神は常に正しいお方ですから、世の罪を罰せずに見過ごすことはなさいません。ですから、私たちの罪をご自分の御子イエス様に負わせて十字架にかけられ、その犠牲によって私たちの罪を消し去ろうとなさいました。

彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

（イザヤ　53・5）

これこそ聖書の偉大なるメッセージです。神の裁きはイエス様に向けられました。そのおかげで私たちに平安が与えられたのです。ここに「罪の赦し」

があるのです。私の罪の負い目はどこに行けば取り去ることができるのでしょうか。どこに行けば神との和解が得られるのでしょうか。その答えがここにあるのです。「イエス様の十字架のもと」です。神の御子であるイエス・キリストの血潮によって、私たちのすべての罪が清められ、赦されるのです。どうかこの神のよき知らせを、あなたが感謝とともに受け取ることができますように。

アメリカ人のウイリアム・ベル・ハルという牧師が興味深い本を出しています。この方は、大戦中に数百万人のユダヤ人を殺したアドルフ・アイヒマンが刑務所に拘留されていた時、十三回も彼のもとを訪ね、長時間にわたり話をした牧師です。彼はアイヒマンが処刑され、地中海に遺灰が撒（ま）かれるまで見届けました。彼は死を目前にしたアイヒマンの最期の言葉を聞いており、彼との対話を一冊の本にまとめて公表しています。本の題名は「魂のための闘い」です。彼は次のように報告しています。「私にとって大事なことは、この恐ろしい罪人が地獄に落とされるのを救うことでした。この男は何百万人もの人間を殺し、世界中に悲惨と恐怖を撒き散らしましたが、さらに恐ろしいことに、最期の瞬間まで彼はこう言っていたのです。『私のために死んでくれる人など、私は必要としない。私は罪の赦しなどまったく欲しくない』と」

あなたはアイヒマンと同じように、罪を抱いたまま死にたいと思われますか。まさかそうではないでしょう。それなら、どうか心から神の御子であるイエス様のところに立ち返ってください。イエス・キリストお一人だけが、私たちの罪を赦すことができるお方です。なぜなら彼は私たちの罪を赦すために死んでくださって、私たちの罪の負い目、神に対する債務を、すべて支払ってくださったからです。

ハル牧師はアイヒマンと対話中、この凶悪な犯

罪者にイエス様の血潮による「罪の赦し」を提供することを、空恐ろしく思ったこともありました。このような人が「罪の赦し」を受けることなど、ありうるのでしょうか。そうです。神の御子イエス・キリストの血潮は、それがどんな罪であろうとも、それを清めることができるのです。しかしそのためにはまず自分の罪を認め、それを告白し、そして十字架を見上げなければなりません。そして次のように言えばいいのです。「私のために、イエス様は尊い血を流し、いのちを捨て、私を罪から贖い出してくださいました。そのことを、私は信じ、受け入れます」と。

聖書は、十字架につけられ死んでよみがえられた主イエス様が、どのようにして罪を赦すことができるのかを明快に示しています。イエス様は十字架で死なれたままではなく、三日目によみがえり、今も生きておられます。聖書のある箇所は、イエス様を「保証人」に見立てています。保証人とは、ある人が借りたものを返せない場合にその人に代わって債務を支払ってくれる人です。私たちが人生で犯す一つ一つの罪は、すべて神の前に支払わなければならない債務となります。「罪から来る報酬は死です」（ローマ 6・23）と聖書は言っています。私たちが犯した罪に対する報酬として、神は私たちに永遠の死を要求されます。

それゆえに、イエス様が地上に来られ、私たちの罪の身代わりとして死んでくださったのです。そのお陰で私たちはいのちを得たのです。イエス様は神の御前で私たちの債務の保証人となってくださいます。私たちは、自分の罪の負い目を、苛酷な地獄で身をもって永遠に支払い続けるか、あるいはイエス様のもとに行き、イエス様の贖いのみわざによって、罪を清められ、罪赦され、解放されるかのどちらかです。ですからどうか、主イエス様を信じ、あなた

のための罪の赦しを受け入れてください。

エルンスト・ゴットリープ・ヴォルタースドルフ氏はある歌の中で次のように歌っています。「私たちのために一人の保証人が来られました。その方は私の罪の負い目を負い、私あての請求書を代わりに受け取ってくださり、その全額を完済してくださったのです」。このことを聖書のある箇所は、当時の奴隷の売買のたとえで語っています。ある人が奴隷として売られていく場合、自分自身で代価を払って自分を買うことはできません。そこへ親切な人が現れてその奴隷の代金を払い、奴隷を解放してくれました。

ところで、この幸福な奴隷はいつから自由の身になったのでしょうか。もちろんすべての金額が支払われた時からです。同じように主イエス様は、あなたのためにゴルゴタの丘でそのすべての罪の代価を支払ってくださいました。それもご自分の血によって。そして自由にされたあなたは、奇跡的に次のように言うことができるようになったのです。「主イエス様、私は自分の罪を包み隠さずあなたの御前に差し出したので、あなたはその罪の代価のすべてを支払ってくださいました。私はそのことを信じます」と。イエス様はあなたの罪の代価を、身代わりとなって払ってくださいました。イエス様はあなたを罪から解放してくださいました。

フィリップ・フリードリッヒ・ヒラーという詩人は、次のように歌っています。「罪は赦された。罪の赦しはあなたが生きていくための神の贈り物であり、苦しみ悩むたましいのためのイエス様がくださる新しいいのちだ」。聖書はまた、このことを「神との和解」という言葉で表わしています。この世の多くの宗教には、それぞれが崇める偶像に「動物のいけにえ」を捧げるならわしがあります。しかし、天地の創造主であるまことの神は、ただ一つの「犠牲」だけを認めておられます。それが世の罪を取り除く神の小羊、イエス様です。イエス様だけが十字架にかかって人類の罪の身代わりとなり、神との和解をもたらした唯一のお方です。しかもその罪の贖いのみわざは、ただの一度で完了したのです。

アルベルト・クナップ氏は次のように歌いました。

「イエス様は永遠に私の目の前に立っておられる。犠牲の小羊として黙って血潮を流し、青ざめた御顔で十字架につかれたイエス様。そのお方が、この私のことも覚えていてくださる。『完了した』と十字架の上で叫ばれたその時も」

また聖書は「洗い清める」という意味の言葉も使っています。「イエス様は私たちを愛し、その血潮によって私たちの罪を洗い清めてくださいました」というように。

聖書にある放蕩息子の話をご存知でしょうか。放蕩息子は放蕩の限りを尽くし、ついには豚の世話をするまでに落ちぶれました。その結果、彼は自分自身の罪に目覚め、ありのままの姿で家に、父親のもとに帰っていきました。彼は家に帰る前に自分自身を洗い清め、清潔な洋服を着たわけではありません。汚れ果てた無残な状態で帰り着いたのです。その彼を父親が洗い、新しい衣を着せてくれました。多くの人々は、キリスト者になる前に、信仰を持つ前に、まず、良い人間にならなければならないと思い込んでいるようですが、とんでもない誤解です。私たちは、汚いままの自然な状態でイエス様のところに行けばいいのです。そして、たとえどのように汚れた人生だったとしても、そのままイエス様のところに行きさえすれば、イエス様ご自身が洗い清めて、すべてを新しくしてくださいます。

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

（1ヨハネ　1・7）

これはヨハネの言葉です。そして私たちも、同じことを告白することが許されているのです。

「罪の赦し」について、聖書はそれ以外にもいろいろな言葉を用いて語っています。あなたもぜひ、これらの言葉に注意して聖書を読むことをお勧めします。そしてこの「罪の赦し」というイエス様の贈り物の驚くべき祝福と恵みを、あなたが感謝して受け取れますようにと願っています。

罪の負い目を担ったままで、どうしたら私たちは人生を生き抜くことができるでしょうか。その答えは、一日も早くイエス様を見いだし、イエス様を通して罪の赦しを体験的に知ることです。そうすれば、深い不安や絶望感は消え去ります。イエス様に自分自身の罪の負い目を委ねることは決して怖いことではなく、不安で暗い地下室から、神の恵みに満ちた光の中に移されることを意味します。あなたご自身にもそのようなことが起こるようにと心から願っています。

ここまでごいっしょに見てきた重要なことを、簡単にまとめておきましょう。私たちは「罪の赦しを必要としている」のでしょうか。はい、必要としています。では、一体どこに行けば「罪の赦しを手に入れる」ことができるのでしょうか。その答は、十字架につき、いのちを捨て、私たちの罪の犠牲となり、私たちを罪から贖い、三日ののちによみがえられた「救い主イエス様」のところです。人は、そこに行きさえすればいいのです。



どうすればイエス様のところに行けるのか

ここまで読んで次のように考える方は、神のすぐ近くにおられます。「罪の赦し」が得られるとは何とすばらしいことだろう。しかしそのために、私は一体何をすればいいのか」と。「罪の赦し」にたどりつく道は、町で売られている本には書いてありません。大学でも教えていません。「罪の赦し」にたどりつく手助けは人間にはできません。あなたご自身が静まってイエス様を呼び求めることです。よみがえられたイエス様は今も生きておられます。聖書では信仰に導かれた人々のことを「イエス様の御名を呼び求めた人々」と言っています。

あなたも、静まって、主イエス様の御名を呼び求めてみてください。「呼び求める」のは、何もむずかしいことではありません。「電話をする」のと同じです。イエス様への電話は誰にも開かれています。あなたはそれを、長い間使ったことがないかもしれません。どうぞ、今すぐに電話をしてみてください。電話番号を知らないって?ご心配なく。ただ「主イエス様」とだけ言えばいいのです。そうすれば電話の向こうで、イエス様が待ち構えていてくださいます。

では、電話がつながった後、何をイエス様に話せばいいのでしょうか。あなたの心の中にあることのすべてを、そのまま、正直に話せばいいのです。たとえば、「主イエス様、私はある人と暗やみの関係を持っています。罪であると知っていても、自分の力では離れられません。主イエス様、どうか助けてください」。あるいは、「主イエス様、私が自分の仕事で申告した税金がここ何年も正しくありません。私は自分が不正を行っていると知ってはいますが、破産に追い込まれるのが怖いのです。どうか助けて

ください」と。あるいは、「主イエス様、私は妻に対して誠実になれませんが、自分ではどうすることもできません。助けてください」と。あなたの呼びかけは、そのまま「祈り」になります。心のおもむくままに、神に祈るのです。

このようにイエス様とお話ができることはすばらしいことです。あなたは他人には言えないことをすべてイエス様に打ち明けることができるのです。イエス様は確実に聞いてくださいます。どうか心にあることを洗いざらい打ち明けてください。それは解放となります。どうかあなたの罪、負い目のすべてをイエス様に明け渡し、そして尋ねてみてください。「主イエス様、この本の著者はあなたの血潮によってすべてが解決されると言っていますが、それは真実なのでしょうか」と。

どうか今すぐにでもイエス様を呼び求めてください。そして長い間使われていなかった回線でイエス様と話をしてみてください。イエス様とはいつでもお話しすることができます。そして主イエス様の御名を呼び求める者の一人になってください。

お話しした後であなたは、「すべてをイエス様に打ち明けたのに、イエス様は何も答えてくださらない」と言うかも知れません。イエス様のお答えの回線がどこにあるかわからなければ、いくらイエス様があなたに語りかけられても、あなたの耳には聞こえません。そこで次に、イエス様がどのような回線を使ってあなたに語りかけられるのかをお話しします。

まず新約聖書を手に取ってみてください。旧約聖書は少し難しいので、まず新約聖書の「ヨハネの福音書」を読んでみてください。そして続いて「ルカの福音書」へと進みます。身近な本を手にするように気軽に読み進めてください。そんな風にして読んでいるうちに、イエス様ご自身があなたに語りかけてくださっている、ということに気がつくのではないでしょうか。

聖書が他の本と違うのは、生きておられる神が、直接私たちに個人的に語りかけてくださるというところにあります。ある人が私にこんなことを言いました。「私は神の御声を聞くために、森の中に行くのです」と。そこで私はこう答えました。「森の中に行けば、木々が風にそよぎ、小鳥はさえずり、小川のせせらぎが耳に入ってきて、さぞ気持ちがいいことでしょう。しかし、私の罪はどのようにして赦されたか、どのような新しいいのちが私の中に流れているか、神がどのようなすばらしい恵みを与えてくださっているかについては、森は決して答えてくれません。それらについては、神は聖書を通してのみ、私に語りかけてくださるのです」

毎日十五分で結構ですから、静かなひとときを持ち、主イエス様を呼び求め、すべてを打ち明けてみてください。たとえば、「イエス様、私は大きな問題をたくさん抱えて、一人ではやっていくことができません」とか、何でもいいのです。あなたの思いをすべてイエス様に打ち明けてください。それから「主イエス様、今度はあなたが私に語ってください」という思いで聖書を開き、一章でも、その半分でも読んでみると、あなたが必要としているみことばが目に飛び込んできます。「ああ、これこそがイエス様が私に言いたいことなのだ」とわかります。その箇所に線を引くとよいでしょう。その線の横に年月日を記入しておくと、あなたは後で見たときに、イエス様の語られた言葉とその恵みに改めて驚き、必ず感謝することになります。

私がまだ若かった頃、あるご家庭を訪れました。その居間のピアノの上に一冊の聖書がありました。手に取って中を見てみると、色々な箇所に赤や緑の線が引かれていて、横には日付が書き込まれていま

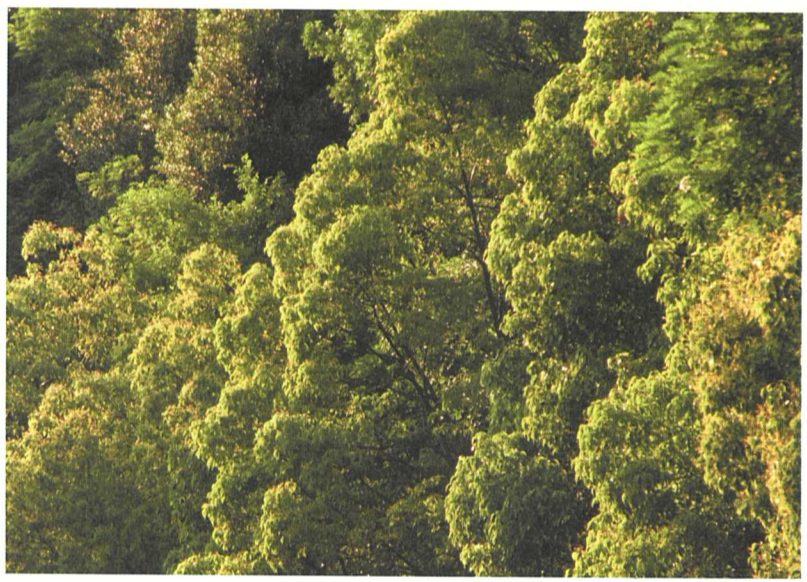
した。私が思わず「これは誰の聖書ですか」と尋ねると、母親が「娘のエミーのよ」と答えてくれました。このエミーが、後に私の妻になったのです。「イエス様は、聖書という回線を通して私たちに語りかけてくださる唯一のお方だ」と信じて人生を歩む伴侶を、私は求めていたのです。

「聖書だって人間が書いたものに過ぎない」と、人々はよく言いますが、これは大変な間違いです。聖書は人間が書いたものではなく、神が人類に語られた大切な言葉の集大成であり、何よりも、今の瞬間にもあなたが抱えるどんな問題にも生きた解答を与えることのできる、信じられないほどの力を持つものです。聞こうとする心さえあれば、聖書を通して直接イエス様の御声を聞くことができます。イエス様は今も聖書という回線を通して、私たち一人ひとりに語りかけてくださっているのです。

そして、もう一つお願いしたいことは、同じ道を歩む人々、イエス様に従って生きたいと願う人々との語らいや交友を求めていただきたい、ということです。私は三十年以上もの間、若い人たちを相手に牧師をしてきました。お年寄りだけでなく、多くの若者たちも罪の赦しを求めて集い、イエス様の罪の赦し、罪からの解放を確信するようになります。また、主イエス様と語ることができるようになり、主が祈りに答えてくださったと証しするようになります。どうか、イエス様とのそのような体験を持つ人々との交わりを、ぜひ求めてください。それは大きな支えとなります。あなたは自分の身近に、「イエス様とともに天の御国への道を歩み通したい」と願う人々を、きっと見つけることができるに違いありません。そしてイエス様は、あなたのすぐ前に立たれて、この瞬間にも次のように語りかけておられるのです。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ 11・28）

イエス様は、私たちの罪を赦し、解放し、新しいいのちを与え、生きがいと励ましを与えてくださいます。そして私たちには、イエス様以外に、私たちを罪の重荷から解放してくださるお方は、誰一人として与えられていないのです。



主のあわれみは尽きない

井上 真智子



右から真智子さん、お父さまの井上隆さん、妹さんのご家族（堀口雄太さん、由美子さん、百花ちゃん）

子ども時代から母の死まで

私は、子どもの頃から母に連れられて教会学校に通っていました。聖書のお話しに親しみ、神様を信じていましたが、それはもっぱら自分を中心としたものでした。自分の中にある悪い思いを知っていたので、「人はみな罪人である」ということは非常に納得できることでした。そして、そのような人間が暮らすこの世は、人の欲で支配される絶望的なところだと思っていました。両親の間に問題があり、母がそのことでつらい思いをしているのを知ったことも、私の世界観、人生観を大変暗いものにしていました。

その中で、生きるための希望、生きる意味をいつも探していました。私にとって一番の希望は自分の将来でした。私は自尊心が強く、負けず嫌いで、主の前でも優等生でありたいと思っていました。この絶望的な世の中で自分がいのちを与えられている以上、自分に与えられた

賜物を最大限活かして、希望のない人たちを救うために働くことこそが意義のあることで、生きる目的、使命だと考えたのでした。あるとき、教会で、発展途上国で医療活動をしている日本人医師の話を聞きました。自分の生活の安定や豊かさのために働くのではなく、このようにすべてを主に捧げる仕事こそが尊く、意味のあることではないかと思いました。そこから私の人生の目標は、できるかぎり努力して最高の仕事をし、社会に貢献することだと思うようになりました。

そこで、中学・高校時代は、社会に貢献できるようになるための準備期間にすぎないと思い、早く医師として働きたいと思っていました。そのためには自分で大学受験の勉強の戦略を立て、努力することは楽しいことでした。しかし、理想の生き方を求め、早く当時の生活環境から抜け出したいと思うあまり、自分の周りの現実の人たちを大切に思うことはありませんでした。母は、私が健康で勉強ができるよう、できるだけのことをしようと気遣ってくれていたようですが、私が家族をかえりみることはあまりありませんでした。人に頼ることはなく、自分で何でもよいと思うことを決めていきました。主はみこころだったら、それを実現させてくださるはず、と思っていました。この頃の信仰は、あくまでも私が「主人」で、主は私にとって都合よく助けてくださる方という存在でした。ところが、努力の結果、入学した大学生活は、あまり楽しくないものでした。あこがれて始めた一人暮らしでも、自分で家事ができないことに気づき、いざ家族を離れて一人になってみてまったく孤独であることを感じました。家族や教会を離れても一人でやっていけると思っていたことは間違いであると気づき、悔い改めました。中学高校のミッションスクールで日々親しんでいた賛美歌が懐かしくなり、教会に行こうと思いました。

あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道

をことごとく知っておられます。あなたは前からうしろから私を取り囲み、御手を私の上に置かれました。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。

（詩篇　139・3、5、7）

その頃、母が私にくれた手紙の一部です。

「あなたが立派なお医者さんになるのはもちろん楽しみですけれども、それ以上に、何よりも一番に願うのは、あなたが神の子とされることであると覚えていてください。この世のことは相対的なことであり、一時的なことですが、神の国は絶対のものであり、永遠に続くものだからです。そして、絶対に確かで永遠に続くものをいただいた者のみが真にこの世の人生をも豊かに生きることができるとわたしは信じているのです。神さまの導きに従って、神さまのよしとされるときに洗礼を受けてください」

この手紙に促されるようにして大学近くの教会に通うようになり、大学二年のクリスマスに洗礼を受けました。

私の受洗と前後して、母に乳がんがあることがわかりました。ごく早期と言われ、一月に手術をしましたが、その直後に肝臓に転移があることがわかりました。あっという間に進行し、三月には余命は三～六ヶ月という宣告をうけました。その年の九月に召されるまでの間、さまざまな思いが私たち家族にありましたが、最後は自ら希望したホスピスで、おだやかに召されました。この世の苦しみから解放された母の葬儀は、主のご栄光を現わすものだと感じられ、葬儀とその後しばらくの間は喜んでいました。

ところが、数ヶ月して日常の生活に戻り、主から目を離したとたんに、サタンが襲ってきました。母が四十八才という若さで召されなければならなかったことがどうしても納得できなくなりました。初期だった乳がんがきわめて速く進行したことは、医療ミスではないか、あのときあの病院にかからなかったら、あのとき違う治療の選択をしていたら…、取り返しのつかない失敗が重なったのではないかと思い、その理不尽さに怒りがこみあげました。母の結婚生活、子育ては苦労ばかりで何もよいことはなかったのではないかと思いました。心の中で、怒りの対象は、治療をした医師や、母をずっと悩ませてきた父に向かいました。そして、主に向かって、こんなひどいこと、不条理で理不尽なことが起こるのを許すなんて、と非難の気持ちでいっぱいになりました。

しかし、そう考えるうちに、自分もまた、それまで自分のことしか考えていなかったことに気づきました。母に感謝や愛情や親しみの気持ちさえも表すこともなく、とても寂しい思いをさせてきたことに気づきました。自分もひどいことをしてしまった、取り返しのつかないことをしてしまった、謝りたくても感謝したくても、もう母はいない…。悔い改めの涙にくれながら、イエス様の十字架で私は赦されているのだ、母は消えてなくなってしまったのでなく、今は魂が天国で安らいでいるのだ、ということをようやく思い出すことができました。自分がイエス様の十字架によって赦されたものである以上、他の人が母に対しておかした罪も責めることはできないのだと知りました。それまでは、頭の中で「罪は赦される」と知っていましたが、自分の罪の取り返しのなさに気づき、初めて赦された喜びを手にすることができたのでした。

主から離れていたとき

その後の大学生活では、信仰生活を守ろうと教会に

神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

（詩篇　51・17）

れらが克服できるに違いないと思い、学ぶチャンスを求め続け、努力を惜しみませんでした。

しかし、母が召された後、遺された私たち家族には試練が次々と与えられました。父は、事業がうまくいかず借金をかかえ、親族間のトラブルもありました。私は経済的に家族を支える立場として、一家の大黒柱であると思うようになりました。医師という職業柄も手伝って、物事の判断を自分で的確に行なうことが重要であると考えるようになりました。主に頼ることをまったく知らなかったのでした。

一方、あまりに困難が続いたので、父、妹、私の三人は、それぞれにいつもどこか不安を抱えていました。また何か悪いことが起こるのではないか、判断を誤ると大きな失敗に結びつくのではないか、という不安がありました。また、子どもの頃に思い描いていたような活躍ができずにいる自分は、このままいっても何ものにもならず、何の意味もない人生を終えることになってしまうのでない

通い、奉仕をしたりしていましたが、友達づきあいが中心になっていました。そこでは、聖書を現代的に解釈し、今日の社会において、イエス様のような生き方をすること、社会的な不平等、抑圧、搾取（さくしゅ）とたたかうことが教えられました。今思えば、それは信仰というより、ある種のイデオロギーのようなものと言えるかもしれません。社会的な問題に目を向け、正義感をもつようになった私は、福音よりもそのことが魅力的に感じられ、あまり信仰上の問題を感じませんでした。当時の私には、みことば、祈り、主を中心とした交わりのいずれもありませんでした。

医師になってからは、仕事を通して得られる喜びもたくさん経験しましたが、悩みも多くありました。めざす理想の医師像にむかって、日々懸命に努力し、研鑽（けんさん）をつみましたが、うまくいかないこと、自分が役に立たず無力であることを知らされる機会がたくさんありました。それでも何とか、よい医師になることでそか、という恐れがありました。自分の知恵と力によって、「もっと、もっと」と上をめざし頑張り続けることへの疲れがありました。夜の大空を見上げては、「自分はこの大きな世界で、たった一人でやっていかなければいけないのだ」と思い、強い孤独感を感じていました。

そこに、ある男性との出会いがありました。その人は、年齢が上で、とても頼りにできるように思えました。生きることに不安、恐れを感じていた私は、何か目に見える形で頼れるものが現われたことで、安心感を覚え、主に感謝しました。「もう一人でがんばらなくてもいいのだ、この人に頼っていけば大丈夫だ」と思い、初めは主から与えられた恵みのように感じました。

しかし、もともとあまり人に頼ることをしてこなかった私は、いざ、頼っていい、甘えていいという状況になると、自分でも驚くほどのわがままが出ていました。主以外のものを主として頼っていたのでした。それは、明らかに主の目から見て罪深い状態でした。しばらくしたある日、非常にわかりやすい形で、主はそれを示してくださいました。急に彼と連絡がとれなくなり、私は完全に裏切られ、見放されたのでした。足元で全体重をかけていたはしごを急に外されたような感覚でした。自分にはもう何もない、と感じました。完全に霊的な破産状態でした。主が介入され、力づくで、私を主の元に引き戻されたのだと思いました。もし、これが主からきたことでないとしたら、私は絶望のあまりすぐさま死を選ぶことも辞さなかったかもしれません。

主に引き戻されてから

その体験は、大きな痛みと苦しみを伴うものでした。心が張り裂けて、実際に血を流しているように感じました。初めて心から主を求めました。聖書を読み、祈り、また、関連した書物を読みあさりました。主から離れて自分勝手に歩んでいたことに、主の怒りをかったのだ

ちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

（イザヤ　53・5〜6）

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。

（イザヤ　38・17）

そして愛であられる主は、おろかな私を遠くから「なさけないやつだ」と思って見ているのではなく、私のすぐそばで、私といっしょに涙して、苦しんでくださっているのだということもわかり、苦しみが少しやわらぐように感じました。

あなたは、私のいのちを死から、まことに私の足を、

から仕方ないと思い、罪の大きさに愕（がく）然としながら、初めはひたすら悔い改めの祈りをしていました。しかし、主が私を主のところに引き戻されたのは、主が私を愛してくださっているその愛ゆえであると気づきました。

次第に、自分が苦しむ中、主は、私の痛み、苦しみを知らないお方ではないということを知りました。主はどれだけ苦しまれたのだろう、愛し信頼していたお弟子たちに裏切られ、人々に石を投げられ、さげすまれ、あざけられて、どれだけつらい思いをされたのだろうと考えました。イエス様ご自身の担われた十字架の痛みがほんの少しわかるような気がしました。自分の愚かさ、罪深さをとことん知らされる中、主の十字架の御苦しみに心から感謝することができました。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはつまずきから、救い出してくださいました。それは、私が、いのちの光のうちに、神の御前を歩むためでした。

（詩篇　56・13）

また、主を求めるうちに、主のみからだなる教会につらなることの必要性が示されました。これは、初めはあまり気乗りがしないことでした。それまで私は、自分の内側で起きていることをほとんど人に話すことがありませんでした。信仰は自分と主の間のことだから、他の人とあえて分かち合う必要はない、教会生活は必要ないと思っていたのです。しかし、交わりの必要性を示されて、しかたなく自宅近くの教会を探して通い始めました。あまり心の内を分かち合うことはできなかったのですが、しだいに、いっしょに暮らしている父がともに礼拝に集うように導かれ、信仰を持つようになったことは本当に驚きの恵みでした。

主を求める思いが強くある中、教会生活で満たされない思いや疲れを感じるようになりました。喜びや平安がないことに悩みつつ、何が問題なのかわかりませんでした。そんなとき、仕事を通して知り合いになっていた藤田亜紀姉妹が、それまでの教会から集会にかわったという話しを聞きました。集会の本を送ってくださり、いかに集会が人間的な組織ではなく、主イエス様が中心となっていて、主ご自身が働かれるところなのだということを語ってくださいました。麻布の家庭集会に初めて行ったときは、確かに驚きました。お会いした姉妹が「イエス様、大好き」とおっしゃっていたこと、生きて働かれる実体としてのイエス様を皆さんが信じて愛していらっしゃること、などがまったく違って感じられました。ベックさんが大きな手で握手してくださいました。

それまで学んだことから、頭ではいろいろわかったつもりになっていましたが、それは信仰とは違うということがわかりました。集会に来てから、非常に多くのことが示されました。

①自分の罪がますます示され、悔い改めに導かれました。

兄弟姉妹の証し、交わりをとおして、自分が、父や妹に対していかに傲(ごう)慢なもので、愛し、敬うことがなかったものであるかを知りました。父が救われて、ともにみことばを読んで祈る恵みが与えられたことをとてもありがたく思うようになりました。そして、姉妹方とのお交わりによって、信仰は自分一人で維持するものではなく、交わりによって支えられ、また成長させていただくものであることを体験的に知りました。

だれが自分の数々のあやまちを悟ることができましょう。どうか、隠れている私の罪をお赦しください。あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。

（詩篇　19・12〜13）

②生きて働かれる主への信頼をいただきました。

仕事上も、自分がよいと思うことを自分の力でがんばろうとしていたことに気づき、悔い改めました。私が何もせずとも、主がしてくださること、私のうちにおられる御霊様が働いてくださることに希望と確信をもつことができるようになりました。それまで、自分自身がとても大切で大きな存在だと思っていたのですが、「すでに自分は十字架上で死んでいる」と知ると楽になりました。絶対的な主権者であられる主の前では、自分は無に等しく、小さく衰えて構わないことを知りました。

③再臨の希望を手にすることができました。

本当の希望は主にあること、主が再び来られる日を待ち望むことのすばらしさを知りました。主の再臨の前には、人間の計画はまったく意味をなさないものになります。野心的な性格の私はついつい自分の仕事や将来に対して、夢や希望をもちがちなところがありますが、それでも、愛する主とお会いできることの喜びとは比べようがないと思うようになりました。いつもともにおられる主イエス様を愛すること、みことばを愛することができることは感謝です。

神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。（1ペテロ　1・3）

このように、何度も転んできた私ですが、そのつど起き上がらせ、新しくしてくださった主に心から感謝します。このような主のすばらしさを多くの方に知っていただきたいと思い、周りの方々の救いを祈っています。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。」（哀歌　3・22〜23）

井上真智子
神戸女学院中高部、京都大学医学部卒業。産婦人科の後、家庭医の道に。北足立生協診療所を経て、帝京大学医学部勤務

わたしは背負う

戸高　真美子



左から2人目、真美子さん。姉2人の受洗のとき、ご家族といっしょに。

私は、三姉妹の一番下として生まれました。主イエス様と出会ったのは小学生のときです。姉が通っていた教会にいっしょに行き始め、聖書を知りました。自分が神様から愛されていることを知って、とても嬉しかったのを覚えています。中学生の頃、母が春日部キリスト集会に導かれ、いっしょに集うようになりました。その頃は救いの確信はあるものの、イエス様に従って歩むことからは遠く離れていました。

大学を卒業してまもなく突然、病が与えられました。腰痛を覚えながらも気軽な気持ちで受診した結果は、卵巣がんの告知でした。私はもちろん、家族中がパニックになり、どう受け止めていいのか混乱しました。二十二歳の私にとって、がんという病は、遠い世界のお話でした。しかし、私自身はすぐに納得することができました。中学生のときキリスト集会発行の「実を結ぶ命」を読み、そこに記されていたドイツの少女りンデの歩み、がんであること知りながら喜びつつ召されいったリンデをうらやましく思い、イエス様といっしょになるのだったら病気を与えてくださいと祈った時期があったからです。この病気は主からの恵みの試練だと確信しました。病状は深刻であり、手術は緊急を要しました。開腹の結果、リンパにまで転移していることがわかりました。すぐに抗がん剤治療が始まりました。

抗がん剤の効果が得られなければ他の治療法は難しいという医師からの説明を受け、「死」は一枚のドアをはさんだすぐ向こう側にありました。先が見えない不安に陥りそうになったとき、みことばが与えられました。

もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。（ローマ　14・8）

このみことばで天国の確信をもち、喜びつつ入院生活を送りました。治療は順調に進み、回復に向かいました。終始主の守りを感じながら、半年間の治療を終えました。その間、家族は日々祈り、この試練をイエス様からのものとはっきり確信するようになりました。ずっと救いを祈ってきた姉が洗礼の恵みに授かりました。家族は喜びで満たされ、主の祝福を全身に感じていました。

しかし、本当の試練はここから始まりました。抗がん剤による副作用の後遺症に苦しめられることとなったのです。がんの治療は終わったものの、手足のしびれが残り、全身の疲労感・倦怠感、それによって睡眠障害になっていき、体調は下降をたどってい

るようでした。日常生活にも家族の助けを必要とするようになっていきました。朝、目が覚めると疲れを感じ、起き上がることができません。人に会うこと、話しをすること、文字を見ること、生活することとすべてのエネルギーが出ず、しだいに暗闇の中に入り込んでいきました。

一点の光も見出せませんでした。主からいただいた試練のはずなのに喜べず、まったく感謝できない自分に落ち込み、みことばも入ってきませんでした。聖書のページをめくる手先の動作が難しく、思うとおりに動かない自分の手にいらだちを覚え、手を傷つけました。その一方で、こんな手でさえも用意されていることを感謝しなければならないのか、と思い、どうしようもない叫びと共に日々泣いているばかりでした。「これは罰だ。主は私を見放された。こんなに私を苦しめて、助けを与えてくださらないなんて」と本気で思いました。

主と私の関係は冷え冷えとしたものになりました。

私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、私は、愚かで、わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした。（詩篇　73・21〜22）

そのような精神状態でしたが、体は時間をかけて少しずつ回復に向かいました。毎日寝たきりでいたのが、起きていられる時間が一日、二日と徐々に増え、一年半後には海外のキャンプに参加できるまでの体力がついていきました。祈りに覚えていただいていた兄姉に会いに行こうと、カナダのバンクーバー喜びの集いに母と参加したところ、証しをするようお話がありました。私は本当に困り果てました。その一年半、喜びも感謝も一点もない歩みで、証しをすることは何もありませんでした。自分が納得するような答えは与えられず、とても証しができる状態ではありませんでした。ペンは一向に進まず、祈るしかありませんでした。主に語っていただくしかない、と祈ったものの、後半が空白の原稿では不安が募り、嘘でいいから感謝ですと言って締めくくろうと心に思いました。

大勢の前での証しでしたので、大変な緊張の中、どうなることかと震えながら兄弟姉妹の前に出ました。壇上に立ち、兄弟姉妹の顔を見渡したその瞬間、みことばのような映像のようなものが頭にどすんと降りてきました。

わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。（イザヤ　46・4）

主が私を背負って歩かれている、そんな映像が見えました。あまりに辛い道のりを歩んできた私は、「なぜ私を一人にしたのですか。お見捨てになったのですか」と、この一年半叫び続けていた者であったことがわかりました。肉体による苦しみではなく、主が答えてくださらないという思いが私を絶望へと追いやっていたのです。自分のことだけを考え、自分を哀れみ、主の御顔をまったく見ていませんでした。「私はこうして二本の足でみんなの前に立っている」、そう気がつかされ、言葉を発する前にただただ涙があふれ出ていました。

証しの最初に口から出たのは、イエス様への感謝でした。悔い改めの思いと大きすぎる主の愛を受けて、私の苦しみはその瞬間すべて取り払われました。体の状態は何も変わっていなくとも、喜びで一杯に満たされ、すべてが変えられた感覚を覚えました。

あなたの太陽はもう沈まず、あなたの月はかげることがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。（イザヤ　60・20）

私にとって生きていく上で最も悲しいことは、主から見放されることであることがこのことを通してわかりました。それならば、この世で生きていく上で一番の悲しみなどもう存在しないことがわかりました。主は私を見放すことなどないからです。たとえ、意味がわからず苦しんだり悲しんだりしても、いつもイエス様と向き合っていこう、主の御顔から背を向けることはもうやめよう、と心から思います。

現在は元気に仕事ができ、日常生活を送っています。このことは主が与えてくださった枯れることのない泉となっています。

昨年、ヘンデル作曲メサイアの演奏にいっしょに参加しましょう、とお誘いをいただきました。私は大学生の頃、興味本位でオーケストラ部に入り、ビオラを少し弾いていました。そのことを知った兄姉が誘ってくださったのです。

正直な思いは、参加したくないというものでした。何年か楽器から離れていたことと、私にはメサイアの楽曲は難しすぎるからです。曲についていけなくては、オーケストラに入ることは苦痛しかないと部活を通して知っていました。理由を見つけて断ろうと思いましたが、聖書を開けば、賛美の言葉ばかり目につきました。

詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。（エペソ　5・19）

賛美が主のご命令であることはわかりました。しかし、演奏によって賛美したい、という気持ちは一切ありませんでした。たくさんの恵みをいただいていながら、なぜ賛美の気持ちがないのか、本当に自分は主に喜ばれない者であることを痛感しました。「御心でしたら、喜んで賛美できる者に変えてください」と祈りました。それでもやりたくないという気持ちは頑として変わりませんでした。今度は祈りを変え、「賛美することが御心であるなら楽器の先生を与えてください。教えてくれる人がなければできません」と具体的に訴えました。さらに、「毎日仕事で精一杯なので、近所で先生を与えてください。もし徒歩圏内で与えてくださるのならやります」と、身勝手な傲慢な訴えをしました。ビオラという楽器がバイオリンほど有名ではなく、教室などめったにないことを知っていた私は、高をくくってありえない祈りをしたのです。

しかし驚くべきことに、家から徒歩十分の場所にビオラ教室があることがわかりました。愕然としました。有無も言わさない主の答えに、首根っこをつかまれて放り込まれた気持ちになり、ただ黙って従うしかありませんでした。

それ以来、キリスト集会合奏団に参加しています。ひどい音色で消え去りたい気持ちですが、主を見上げて賛美すると、主が生きておられる喜びで言葉では言い表せない気持ちになります。賛美は主から与えられ、また主にお返しするもののように感じます。合奏団の兄弟姉妹たちとのお交わりに加えられたことも本当に感謝です。主に従うと必ず良くしてくださることをまた一つ体験できました。

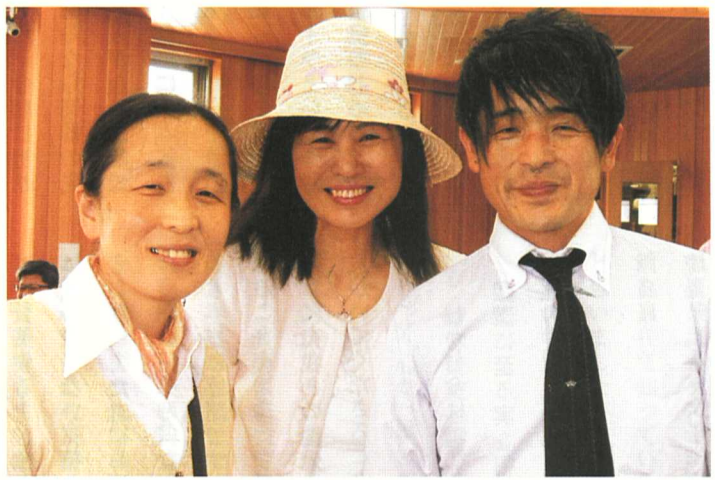
常に自我との地道な闘いですが、すべての背後に主がいてくださることを確信し、感謝です。

しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。（ローマ　6・22）

戸高真美子
埼玉県出身、女子栄養大学栄養学部卒
株式会社とだか建設勤務

わたしはあなたを捨てない

渡辺 ゆきみ



左から義姉の渡辺美和子さん、ゆきみさん、夫の孝之さん

二〇一一年六月五日、吉祥寺キリスト集会所で夫孝之と共に洗礼を受けさせていただきました。新会堂での初めての洗礼式、しかもそのトップバッターが夫であったのは、大きな恵みでした。この洗礼への想いは、前年の十一月ころから私の心に強く芽生えたのですが、ベックさんの入院などもあり、実現できませんでした。そのときは、まだ時期ではないのかなと思っていましたが、「イエス様、どうかベックさんの手を通して夫婦共に洗礼を受けさせてください」とずっと祈っていました。それから半年後、多くの兄弟姉妹の祝福のもと、洗礼を受けさせていただくことができました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。

（伝道者　3・11）

このみことばは、義姉の渡辺美和子姉妹が受洗のときにくださったものです。イエス様は最善のときに最高のみわざで、私たちに恵みと救いを与えてくださった、と実感しています。

私は、一九六〇年に北海道旭川で生まれました。私たち夫婦は、お互い二度も離婚をし、昨年二〇一〇年七月七日に三度目の結婚をしました。モーセの十戒にある「姦淫してはならない」という戒めは、私たち夫婦にとって、最も厳しい戒めです。イエス様を知らなかったころの私は、二度の離婚が心に重くのしかかり、なにか辛いことがあると「これは天罰だ」と思っていましたし、ろくな死に方はしないだろうな、などと漠然と考えていました。

二度の離婚で、私たちは夫や妻だった人を傷つけただけではなく、子ども（夫には娘、私には娘と息子がいます）を苦しめ、互いの親たちや兄弟、関わっていた周りの人たちにも悲しい思いをさせました。その罪がわかっているのに、認めるのが怖く、友人

知人にはもっともらしい理由（言い訳）をつけて自分を正当化し、罪に罪を重ねる日々を送っていました。まさに私たち夫婦は、放蕩息子とサマリヤの女が結婚したようなものです。でも、そのようなどうしようもない私たちを、イエス様はお見捨てにはならなかったのです。

怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ。（イザヤ　54・8）

私は、離婚を二回もしていて、子どもが二人いて、しかも一人っ子で親の面倒をみなくてはならない。住居のマンションには、七十一歳まで返済を続けなければならないローンがある…。私の息子が七歳も年上の、そんな人と結婚したい、と言ってきたら、即刻反対するでしょう。事実、私たちの結婚は、夫の周囲からは反対されていました。でも、優しい夫は「家族の反対はゆきみちゃんが問題なんじゃないよ。俺があまりにいい加減に生きてきたから、俺が原因なんだから心配しないで」と慰めてくれました。後でわかったのですが、夫は二度目の離婚の後、「もう結婚しない」と家族だけではなく、ベックさんにも宣言していたそうです。その約束を破ってしまったのですから、お母さんやお姉さん方が反対するのは当然だったのでしょう。それでも、私は結婚する前にお会いしたい、と切に望み、お母さんにその思いを手紙で伝えたりもしたのですが、残念ながら結婚前にお会いすることは叶いませんでした。義母に当たる渡辺多美江姉妹は、きっと心を痛めていらっしゃったのでしょう。その後、手紙のことでとても恐縮され、私に詫びてくださいました。でも、お母さんやお姉さん方は、いままでの夫の苦しみや、そこに関わった人たち、とくに夫の一人娘の悲しみをよく知っていたので、その心中はさぞや苦しかったことと思います。結局、私たちは、「子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい」（コロサイ 3・20）というみことばに反して、賛成を得られないまま入籍してしまいました。そこでも、私たちは罪を犯したのです。

そんな親不幸な私たちでしたが、二〇一〇年八月二十二日、夫の二番目の姉、谷原由紀江姉妹の計らいで、谷原宅で夫の家族・親族と一堂に会うことができました。夫の母と二人のお姉さん、義理の兄に当たる谷原操兄、そして谷原家の子どもたち、操兄のお母さん谷原くら姉妹…の方々です。本当に大きな恵みでした。私は、歓迎されていないと思っていましたから、緊張と不安の中、なにを言われても耐え忍ぼうと覚悟して、出向きました。でも、一方で、やっとお会いできる喜びもありました。そのとき、私はイエス様に出会うことになったのです。

私にイエス様の話をしてくださったのは、谷原操兄でした。正直、話の内容をすべて理解できたわけではないのですが、その中で、印象に残ったのは、「悔い改める」ということばでした。操兄は「人はみな罪人だ、とイエス様はおっしゃっています。でも、悔い改めれば私たちの罪をイエス様は赦してくださるのです」と話してくださいました。罪人だ、と言われたとき、まさに私のことだ！と思いました。「悔い改める」ということばをいままで口にしたことはありませんでしたが、「反省」とは違い、もっと奥が深く強いもの、という印象でした。神様はいる、とは思っていましたが、私にとって神様はとても怖い存在でした。どんなに言いつくろっても、神様だけはだませないと思っていましたから、赦していただけるということばは、大きな衝撃であり、慰めでした。

その後、夕食前の祈りで、「ゆきみさんを家族の一員として与えてくださったことに感謝します」と

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（1ヨハネ　1・9）

イエス様を受け入れてから、私はあることを思い出しました。たしか小学校の低学年のころ、本で読んだのか映像を見たのか、よく覚えていないのですが、神様からの声を聞いているイエス様の姿が印象に残り、私も神様の声を聞きたいと思いました。そして、一人で雪の降るだれもいない公園に行き「神様、声を聞かせてください。私に何か話してください」と祈ったことがあったのです。私のこの小さな祈りを、永遠の祈りとしてイエス様は受け入れてくださり、四十年後に、しっかり私にも神様の声を感じることができるようにしてくださいました。子どものときは、なにも聞こえず、がっかりしたのですが、いま思えば、ずっとイエス様は私に語りかけてくださったのですね。

まことに、私たちの神、主は、私たちが呼ばわるとき、いつも、近くにおられる。（申命記　4・7）

神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。（伝道者　3・11）

谷原家でイエス様の話を聞いてから一ヶ月後、神澤兄姉宅での家庭集会で初めてベックさんにお会いしました。夫は二度目の離婚後「もう結婚しません」とベックさんに宣言していましたから、新しい妻の私と共にベックさんに会うのはかなり勇気のいることだったようです。でも、ベックさんは「イエス様は、過去の罪を思い出す方ではないよ。だから、天国へ行って罪の話をしても、えっ？なんのこと？って言われるよ」と、おっしゃってくださいました。その一言で夫は救われたようです。ベックさんの大きな温かい手と優しい笑顔に、私も救われた思いがしました。

イエス様を受け入れてから、私たち夫婦の生活も変わってきました。もともと仲のいい二人でしたが、それでも悪魔のささやきに負けそうになったりして、夫婦仲に暗雲が垂れこむこともありました。でも、いまではそういうときこそ、必死に祈っています。必ずイエス様は私たちに御手を差し伸べてくださり、いままで以上に二人の絆を強めてくださいます。

おのおの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。妻もまた自分の夫を敬いなさい。（エペソ　5・33）

夫の家族・親族は、とてもよくしてくださり、乳飲み子のような私の霊的成長を心から祈って導いてくださり、感謝でいっぱいです。イエス様は、すばらしい夫だけではなく、一人っ子だった私に、かけがえのな

い主にある兄弟姉妹をも与えてくださいました。

今年二月、私は尾てい骨を骨折し、身動きできなくなり、救急車で病院に運ばれました。病院で痛みに耐えながら「イエス様、助けてください」と祈っていたのですが、そのとき「さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい」（ヤコブ 1・2）というみことばが与えられ、心配していた夫や息子たちには申し訳ないのですが、しだいに、この状況にわくわくするほど喜ぶようになりました。

入院を含めて約一ヶ月の静養中はとても平安で、同じ病室の方に福音を伝えることもできました。それ以前は常勤で働いていたので、なかなか家庭集会や祈り会に出席できず、もっと交わりの場に出て行きたい、夫や息子がほっとできる家庭になるよう、余裕を持って家事をする時間がほしい、と思っていました。でも、静養期間中は、自宅で祈り会をする恵みを与えられたり、イエス様に関するＤＶＤを鑑賞したり、書籍を読んだり、集会のメッセージの録音テープを聴いたり、ゆっくり夕飯を作ったり、買い物に出かけたりする時間が与えられました。そして、これを機会に、私は仕事を減らしていただくよう上司に依頼し、新しいスタッフも補充されて、少しずつイエス様との時間を持てるようになりました。

私と私の家とは、主に仕える。（ヨシュア 24・15）

三月の巨大地震でも、イエス様は「主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる」（詩篇 121・7）とおっしゃっていますので、何の不安もなく、穏やかに過ごすことができました。「わたしの恵みは、あなたに十分である」（2コリント 12・9）のみことばのとおりです。

夫と私の家族の中には、まだ救われていない者がいます。いまは、これらの、まだ救われていない家族のことが一番気がかりです。一日も早くイエス様を救い主として受け入れてほしい、と切に願い、祈っています。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒 16・31）という聖書の約束を信じて、その日を待ち望んでいます。

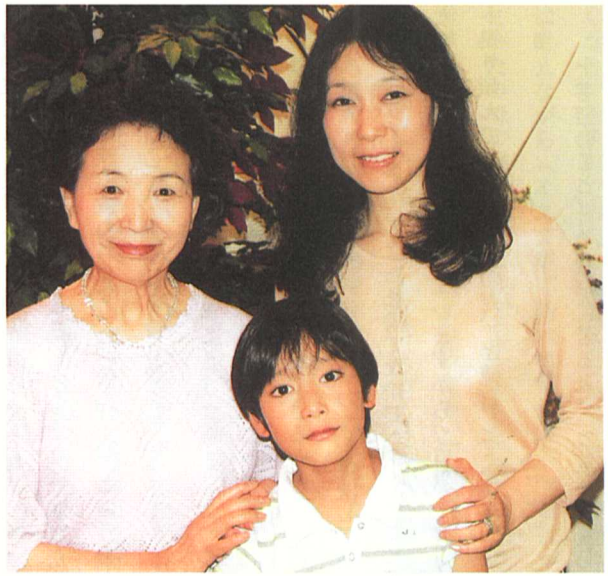
私は救われてからまだ日が浅く、厳しい試練を与えられたとき、心から喜ぶことができるかどうかわかりません。けれどもイエス様は「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」（ヘブル 13・5）とおっしゃってくださっていますから、百パーセント拠り頼んでいけばいいのだ、と確信しています。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

（1コリント 1・18）

渡辺ゆきみ
一九六〇年北海道旭川市生まれ
神奈川県立横浜緑ヶ丘高校卒、横浜国立大学教育学部卒
夫　孝之、長女　近藤ともみ、長男　木屋巧己（きや　たくみ）
現在　神奈川県三浦市在住





左から昭代さん、孫の辻直希くん、娘の辻弥生さん

その愛とあわれみによって

宮城　昭代

キリスト集会に導かれて以来、早や二十年余の歳月が流れました。その間、主の奇しきみ業をこの目で、この耳で、この貧しい心で数知れず見ることができました。

それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。

（詩篇　139・13〜14）

私は、一九四二年、小京都といわれた南信州の飯田市にて、姉と弟の四人兄弟の三女として生を受けました。家は、米、雑穀、肥料などを扱う問屋として、かなり手広く営んでいました。子どもの頃の私は人前で話をすることが苦手な恥ずかしがりやでした。でも近所の友だちと元気に遊び、小中学の九年間、皆勤賞を頂くほど、健やかに育てられました。

私が十六歳（高一）のとき、祖父母や父によく仕えた忍従の母が自ら生命を絶ちました。人々に慕われた優しい母でした。私にとって、ただ一つの宝物のごとき母、その突然の死にただ涙を流すばかりでした。このとき小学校一年から三年までの担任だった先生が訪ねてくださり、じっと私を見つめながら、「昭ちゃん。お母さんはいつも天国で昭ちゃんのことを見ていてくれるよ。昭ちゃんが悲しんでいるとお母さんも悲しいよ・・・」と、小学生に語りかけるような口調で慰めてくださいました。忘れることのできない恩師のことばでした。この日から私は天国の母に心配をかけぬよう笑顔で生きていこうと思いました。幸い、静かに見守ってくれた温かい周りの人々の中で、次第に心が癒されていきました。屈託なくニコニコしている反面、母に孝行すら何一つできなかったという空虚な思いなど、五十年あまり前の遠い記憶がふつふつとよみがえります。

母は肋膜を病み、初めての入院で父が毎日、見舞っていました。当時は肋膜というと死の病と恐れられていましたが、退院後の母の状態はすぐれず、そのうち精神的なことで眠れぬ夜が続いて、とても苦し

そうでした。娘たちの縁談に障ってはと病院に行こうとしませんでした。そんな中、家族に詫びながら・・・ぎりぎりまで生きてくれたのだと思います。幸い今日まで母への恨みごともなく、愛しい母のままです。この母との別れは、次のみことばとともに私の信仰へとつながる原点となりました。

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。（イザヤ　63・9）

高校卒業後は上京し、私はイエス・キリストを土台とする学園に入学を許されました。毎朝みことばが取りつがれ、よくはわかりませんのに、「野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。……栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。」（マタイ 6・28、29）などのみことばが内にじーんと響いて、素晴らしいと思いました。

卒業後は東京で就職し、三年後ふるさとに帰りました。二十三歳のとき、建設省中部地方建設局の局長秘書だった九歳年上の心優しい寛容な夫と結婚いたしました。長女弥生が三歳、そして次女の久美子が生後四ヶ月になりましたとき、夫の父が退職後始めた光学関係の小さな事業を継いでほしいと切望され、夫は方向転換を迫られ、伊那の地に移りました。

夫の父と後妻の義母四十九歳が新居に迎えてくれました。義父が私たちに、「今夜は十帖の座敷で寝るように」と言ったことから、義母が急に大声で怒り出し、こうして同居生活一日目が始まったのです。よき嫁になろうとしましたが、かえって義母のきびしい視線は、二十代後半の未熟な私に集中し、義母の支配的な感情に揺すぶられました。その様子を長女弥生が敏感に察知し、心因性の熱を出すというくりかえしに、夫も辛かったと思います。

その頃、私は近くの教会へと導かれました。義母は、「この家は仏教だから異国の神なんか持ち込まないでくれ、家が滅ぶ」と言いましたが、義父が、「月三回まで許す。昭代が潰れてしまうといけないから」と気遣ってくれ、夫も賛成してくれました。

最愛の夫が召されたのは、娘たちが十六歳と十三歳のときでした。私は癌告知のことで悩んだすえ、「手術は成功だって。悪性だけれど、ごく初期の…」と語りました。どうしようもなく苦しいのに、笑顔ばかりを見せ、夫婦としてほんとうのことが言えなかったことが、いつまでも哀しく悔いが残りました。夫は胃の全摘手術の二年後、再発し、召されました。

娘たちは大好きな父のそばで、手や足をさすったりして、けなげに付き添いました。「お父さん！イエス様を信じて！」と、私に続いて弥生も久美子も言って、教会牧師より洗礼に預かりました。このとき、「お父さんにまた会える」という希望が子どもたちの心に灯され、優しく温かいイエス様に支えられていました。

夫の遺した四十人ほどの会社には乗っ取りが企てられました。表向きは道義的責任において…と公表しましたが、虚偽に固められたドロドロとした裏のことを見ました。深い淵に吸い込まれるような思いの中、私は祈りといえぬ祈りによって、イエス様に叫びました。身内を裁いたり、憎しみを持たぬよう示され、これらから身を避けられましたのは、主のあわれみだったと思います。会社のことは、イエス様が私の代わりに戦い、勝利してくださいました。それは完全でことごとく最善な奇しき主のみ業に他なりませんでした。主のご真実に私は圧倒され、この出来事を通し、主への揺るぎない信頼へとつながりました。

ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。……すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。（ローマ　11・33、36）

長女、弥生は二十数年前にしあわせな結婚に導かれました。弥生とは、集会に導かれてから、共に祈りながら歩んでくることができました。この娘によって、義母の反対をかわし柔らげてくることができました。義母も、今では「今日は祈り会なの？」とか「御代田の家にいつから行くの？」などと言って、快く「行ってらっしゃい」と言ってくれるようになりました。義母との暮らしも、家族の中の誰よりも長い四十年余になります。義母は九十一歳になり、初期の肺癌の病を与えられ、「お母さん、お願いね」とか「みんなと暮らせて最高にしあわせ」などと言ってくれ、四世代、七人家族の中で、私を頼ってくれるようになりました。

私はかつて、「義母は私にとって癌のような存在」と思っていました。しかし、いまではずっと前になりますが、あるとき主は、義母のことがなければあなたは教会に行くことはなかった、と教えてくださいました。「義母もまた私のために主が用いて、置かれた…」と、わからせていただきました。聖書のみことばに出会うことによって、悔い改めに導かれたことは感謝です。

キリスト集会との出会いは、教会の書棚にベック兄の「実を結ぶ命」を見つけ、手に取ったことに始まります。また、この頃、山川千秋兄のご葬儀のテレビ放送の中で、ベック兄は「人は病気によって死ぬことはありません。神様の時が来なければ・・・そして神様の時は最善です」と言われました。このとき私は無性に、ベック兄にお会いしたい！と思いました。教会生活十年の年の暮れ、K姉妹がベック兄の所に私をお連れくださいました。聖書をひもときお交わりくださった、この奇しき主のお導きの中で、ここにはイエス様がおられるという大きな喜びを覚えました。その後、祐天寺の集会に私をお連れくださったH姉妹が、車中、「どんなことがあっても心の奥の平安が消えないのよ」と言われたことばのように、いつまでも消えない平安を覚えることができました。

また、ある日、福音メッセージを聞いていて、何かスーッと「みことばを信じます。みことばはすべて神様ご自身のおことばですから」と受け入れることができ、主のご真実を確信いたしましたことは何という幸いでしたでしょうか。母の死も夫の死も、私にとってかけがえのない人との辛い別れでした。しかし、もしこのことがなかったなら・・・、私はイエス様を愛することも避け所とすることもなく、さまよっていたことでしょう。与えられた一つひとつの苦難は、主のご愛の対象として、砕いて、主の側に引き寄せてくださるための…、そして少しでも主の器としてくださるための試練だったのでしょうか。

また私にとって、この年月は自らの肉と、神様が下さっているいのちの御霊とが、私の内でせめぎ合うことを波のように繰り返しながらの日々でもありました。

わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。（ヨハネ　13・7）

一つひとつ与えられたみことばが泉のごとく心にしみてきます。みことばと御霊によって導かれ、十字架の贖いのゆえに一方的な罪の赦しに預からせてくださったイエス様、あなたの大いなるご愛とご真実によって、あいまいな信仰の立ち所を心から悔い改める恵みにも預かりました。二十年余の長きにわたり、敬愛するベック兄、ミンヘン姉をはじめ、多く

のご兄姉方が伊那、岡谷においでくださった無償のご奉仕に、さらに、素晴らしい恵みを与え続けてくださった主にあるご愛に、心から感謝いたします。

ベック兄が伊那の地で家庭集会をお開きくださって二十年余、はじめの十年は毎月一回、昼の部と、お勤めの方のために夜の部とを設けてくださり、お帰りはいつも深夜十一時でした。東京のお宅にお着きになるのは翌未明だったことでしょう。こうして、こんな私たちと共に歩み続けてくださった幸いは、言葉につくすことのできない感謝でいっぱいです。伊那集会が兄弟方を中心に、一つからだとされていますこと、みことばによる導きと、生きておられる主のご真実とお守りと、周りの集会のご兄姉方の祈りのうちにあるご愛と恵みを感謝しています。

過日、御代田の礼拝メッセージの中で、ベック兄は、祈りについて、「祈りは、私たちにできる大いなること、親族、家族のために叶うまで祈り続けることがどんなに大切か、すべての失敗や失望の原因が祈りの不充分さによる…そして、祈りの前提条件は全き明け渡しだよ…」とお語りになりました。「全き明け渡し」とはどのようなことか、ずーっとそればかり考えていたことでした。この日、私は家族の救いのために祈り続けようと決心し、ノートに「なんと祈りの乏しい私でしょうか。イエス様、何も良きもののない私を、こんな私のまま明け渡します。そして、貧しいこの明け渡しを主が受けとっていてくださると信じます。自分では何もできない無力で愚かな私ですから、イエス様、あなたの偉大な御力によってお導きください。希望にあふれて…」と綴りました。

たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。（2コリント　4・16）

いつの間にか高齢者の仲間入りをして、衰えを感じます。でもこのみことばのとおり、キリストのゆえに日々新たにされ、いのちの道を示されている幸いを心から感謝いたします。すべては、万物を創造し、すべてをご支配しておられるイエス様の周到なご計画の中ですから、わからないことが多くとも、全く信頼いたします。こんな者がイエス様に愛されているという恵み、思いもよらない、素晴らしい、何にも替えがたい慈しみと、喜び、平安で満たしてくださっているという恵みに、しみじみと胸が震え熱くなりました。イエス様の御名を賛えます。

この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。（ローマ　5・5）

ご再臨の間近い今、主イエス様の来られるのを待ち望みつつ、ひたすら、祈りの生活に導いていただきたいと思っています。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。（1ペテロ　1・8）

わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。（ヨハネ　4・14）

宮城昭代
飯田市生まれ
飯田市立大久保小学校、飯田市立東中学校、長野県飯田風越高等学校、自由学園生活学校卒

若い日に、あなたの創造者を覚えよ

長岡 健次



妻の伊津子さんと

「お父さん。私、バンクーバーで救われた！」

今から九年ほど前のことでした。高校二年生だった娘が春休みにバンクーバー喜びの集いに参加して、帰って来た時に言ったのが、この「証しの報告」でした。私も家内も驚きました。

「バンクーバーで救われた？どういうことなんだろう」。私は娘が救われたことに喜びながらも、大きな戸惑いを隠せませんでした。

「でもおまえは聖書も読んでいたし、一緒に祈ってもいたし、集会に行って聖餐にもあずかっていたよね。イエス様を信じていたんじゃなかったのか？」

生まれた時から集会に来ていた娘は、小学生の時に洗礼をベック兄から授けていただいており、特にイエス様への信仰について親として疑問に思うところはありませんでした。私たちは、当然娘は救われていると思っていました。

しかし娘はこの時、自分は全然信じていなかったこと、私たち家族が聖書の話しをしている時もただ話しを合わせていたこと、そして今回のバンクーバーでの若者の交わりの際、主の光に当てられて罪を知り、悔い改めて心からイエス様を信じたことを証ししたのです。

私は娘の救いに心から感謝しつつも、大変に考えさせられました。子どもは自動的には救われないことを知ったのです。たとえクリスチャンファミリーに生まれて、聖書と一緒に生活をしているようでも、子どもが個人的に主と出会う時が来る、イエス様の十字架の血潮によって罪が赦され救われる日が来ることを知りました。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。　（伝道者　12・1）

このみことばから、子どもの救いと幸せな家庭生活について聖書は何と言っているかを、私の小さな証しを交えながら考えてみたいと思います。

私にはもう一人の子どもがいます。三歳年上の長男です。生まれた時に、初めての子を授かって喜びましたが、同時に戸惑いもありました。これからどうやってこの子を育てたらよいのだろうか？自分と同じような人間になってしまったら困るな、と思いました。その私とは次のような人間であったからです。

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

（エペソ　2・1～3）

あなたがたは、異邦人たちがしたいと思っていることを行ない、好色、情欲、酔酒、遊興、宴会騒ぎ、忌むべき偶像礼拝などにふけったものですが、それは過ぎ去った時で、もう十分です。（1ペテロ　4・3）

これらのみことばは、私がどのような人間であるのかを正確に表してくださっています。全く目を覆

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。

（ローマ　13・1～2）

いたくなるような者、それが私でありました。ですから自分のような子どもが生まれたら困ると思ったのです。

ここで少し私のことを申し上げたいと思います。

反抗と遊興の生活、これが少年時代からの私の本質でありました。特に、反抗する、権威に対して反抗するというのは、私の生きる目的のようなものになっていきました。幼少のころからわがままであった私は、中学生になると両親や先生に対して激しく反抗するようになりました。高校では酒やタバコをやるようになり、オートバイを乗り回し、そしてパチンコにふけるようになりました。

このパチンコについては、初めは軽い気持ちで始めたのですが、しだいに私を虜にしていきました。パチンコでいかに勝利して玉を積み上げ大金を手にするか、これが生活の中心になりました。学校が終わるとパチンコ屋に行き、時には学校をさぼって台に座っていました。大学受験の時には関西に行きましたが、受験地の京都でもパチンコをしていました。なぜそれほどにパチンコに執着したのか、もともと賭け事が好きだったこともありますが、生来のわがままと反抗の具体的な表れがこのパチンコであったのです。パチンコとは私の反抗する心の象徴でありました。

しかし、京都の大学に進学して関西に出てきた私は、このパチンコについてどうしようかと考えるようになりました。京都の山科に下宿を決めた私は、いつものようにパチンコに出かけようとしましたが、その時「もう十分ではないか」と思いました。「今までやりたいだけやったではないか。もういい、やめよう」と思いました。

それから不思議なことに今に至るまでパチンコはやっていません。やりたいとも思わなくなりました。それどころか、他の賭け事、競輪、競馬、マージャ

ン、宝くじ、株式投資などにも全く興味がなくなりました。「もう十分だ」と思っていたからです。

そのようにパチンコから足を洗ったのでしたが、進学して二年ほどしたころ、私は強度のノイローゼに見舞われ、うつ状態に陥ってしまいました。初めて経験する不安と不眠の中で、それまでの高慢が砕かれていきました。傍若無人（ぼうじゃくぶじん）でやりたい放題の尊大な者が、今や自分ではどうすることもできず怖れと不安の中で震えているありさまだったのです。自分の隠されていた本質を嫌でも知ることになってしまい、私は唖（あ）然としてしまいました。

その後卒業、就職して学生時代からの知り合いであった家内と結婚したわけですが、長男の出産を控えて、家業を継ぐことになり故郷の長野に戻ってきました。そのころ、京都の下宿の先輩であり、後に救われていた集会の兄弟が訪ねてきてくださり、私を軽井沢のバイブルキャンプに連れて行ってくださったのです。こうして五年ほどの間に二十回くらいキャンプに参加しましたが、かたくなな私はなかなか心を主に開きませんでした。しかし、私が反抗してきたのは、権威の中の権威、すなわち主権をもっておられる神ご自身に対するものであることが、しだいに分かってきました。

「もう十分です。反抗するのはもう十分です。どうかお赦しください」とイエス様に祈り、私は救いをいただきました。

そして家内も救われ、我が家は小さなクリスチャンファミリーとなりました。そこで生じたのは、小さな子ども二人も含めた我が家で、どのような生活をしていったらよいのかという問題でした。子どもたちもイエス様を信じてほしいと思いました。自分だけが幸せになり、家族が取り残されるのはまずいと思ったのです。

また家内との関係も考えさせられました。当時、私と家内とは、たがいに秘密は持たず何でも話し、お金についても分け目なく、夫婦が離れないようにと心がけてはおりました。しかしその私どもの間にイエス様をお迎えすることになったわけです。このままではよくない、夫婦の中にもみことばが入らなくてはいけないのではないかと感じるようになりました。

幸いなことよ。すべて主を恐れ、主の道を歩む者は。あなたは、自分の手の勤労の実を食べるとき、幸福で、しあわせであろう。あなたの妻は、あなたの家の奥にいて、豊かに実を結ぶぶどうの木のようだ。あなたの子らは、あなたの食卓を囲んで、オリーブの木を囲む若木のようだ。見よ。主を恐れる人は、確かに、このように祝福を受ける。主はシオンからあなたを祝福される。あなたは、いのちの日の限り、エルサレムの繁栄を見よ。あなたの子らの子たちを見よ。イスラエルの上に平和があるように。

（詩篇　128・1〜6）

救われた者にとって、理想ともいえる家庭がここに記されています。これは非現実的な空論ではありません。主を呼び求めればだれでも実現できる、という素晴らしい約束です。そしてこのような祝福を得るためには、皆が（特に家長である兄弟が）主を恐れ、みことばが示してくださる家庭における秩序を尊重し、心を尽くして従うことが大切だと思います。みことばに反抗する時に、家庭の秩序と平和は破壊されてしまい、反対にみことばを尊ぶ時に豊かな主の祝福が家庭に満ちるのではないでしょうか。

以上のことに加えて、私は子どもたちの教育についても考えさせられました。

さて、イエスにさわっていただこうとして、人々が子どもたちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちは彼らをしかった。イエスはそれをご覧になり、憤って、彼らに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。」そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された。

（マルコ　10・13〜16）

子どもを授かった時、自分のようになったら困ると思って始めたしつけでありましたが、私たちは日常のあいさつや、ドアの開け閉めといった当たり前のことが普通にできるようにと心がけ、しつけていました。そして我が家にイエス様をお迎えした時に、子どもたちにはどうしたらよいのだろうかと考えました。

このマルコの福音書10章の箇所には、二種類の大人が出ています。子どもたちをイエス様のところに連れていった大人と、連れていくまいとした大人たち、です。私たちはどちらの親なのでしょうか。

このように言いますと、もちろん自分は子どもたちをイエス様のところに連れていく方だ、とおっしゃる兄弟姉妹が多いと思うのですが、まだイエス様に出会っていない方々では、連れていくまいとする大人のグループに入っている家庭が非常に多いのではないでしょうか。

子どもたちは、持って生まれた自分勝手にやりたいというわがままな性質ゆえに、さまざまに親に訴えてきます。

日曜日に礼拝に行けば、学校の仲間からのけ者にされる、友達ができない、勉強する時間がなくなってしまう、クラブ活動はどうするのだ、また、集会に行っても友達もいないし面白くもない、それらのことを繰り返し親に訴えてくるわけです。我が家でもそうでありました。

それに対し、親たるものは聞く耳をもってはならないのではないでしょうか。礼拝に行こうとしない子どもに対しては、親は神様から授かった権威と力を持って、厳しく子どもを指導しなくてはならないと思いました。

そのようなわけで、我が家の決まりとして、正当な理由なくして礼拝に行かない者は、家を出なければならないということが加えられました。これは幸いにして、いまだに破られたことがないのは、本当にありがたいことであり、主に感謝すべきことだと心から思います。

あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましょう。

（マタイ　7・9〜11）

どうしたら家族が皆幸せになれるのか、それはここに示されている「良い物」、すなわちイエス様を求める家族になることであります。皆がイエス様を好きになり、イエス様に何でも祈り、頼り、またみことばを食べ、尊び、そして皆がそろって集会に行くことであります。そうすれば、必ず間違いなく幸せな家庭となることができます。

あの方（イエス様）は盛んになり私は衰えなければなりません。（ヨハネ　3・30）

主が下さった救いとは、本当の自由すなわち解放であります。自分の思っていること、考えていることは少しも大事ではない、大事なのはイエス様だ、というこの聖書のメッセージは、自分のことばかり考えて来た私には革命的なものでありました。自分がもう一度新しく生まれ変わったかのように感じたのです。「もう自分は反抗することに縛られることはないのだ」と思い、心から感謝しました。

「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ」（伝道者 12・1）という聖書のメッセージは、他に代え難い何よりも大切なものの存在を教えて下さいます。子どもたちがぜひイエス様のところに来てほしい、イエス様のところにいてほしいということであります。

私たち大人は、子どもたちがイエス様のところに行くことに、少しの妥協もすべきではないのであります。一番良いもの、すなわちイエス様を知ってもらいたい、それ以外に何の人生の恵みもないのですから、これを放り出すわけにはいかないのではないでしょうか。

終わりに、集会のある家族の目標について以前お聞きしたことがありますので、それを紹介させていただきます。

家族の目標

①イエス様大好きな家族になろう。
②お父さんはイエス様に従い、お母さんはお父さんに従い、子どもたちは親に従う家族になろう。
③皆がやさしい気持ちを心がけ、愛し合い祈り合う、思いやりの育てる家族になろう。
④ありがとうが言える、明るいやさしい声のあふれる家族になろう。
⑤家族の中から、意地悪な気持ちを追い出そう。
⑥まちがった時には、ごめんなさいと言える家族になろう。
⑦他の困っている人や悲しんでいる人のために、イエス様に祈る家族になろう。
⑧イエス様に喜ばれる家族になろう。

私たちそれぞれの家庭でも、同様な目標が持てれば、主の限りない祝福のあふれる家族となることができるのではないでしょうか。

同様に私たちの集会も、同じ目標をもつことができれば、素晴らしい愛にあふれるいのちの交わりの集会となることができるのではないでしょうか。



長岡　健次
一九五六年　長野県生まれ
松代小、松代中、屋代高校、京都薬科大学大学院修士課程修了
大丸合成薬品株式会社　代表取締役

ご真実なるイエス様

長岡 伊津子



夫の健次さんと

イエス様と出会ったことは、私には考えてもみなかったことでした。けれども、主イエス様は、はるか前から私に恵みの道を用意していてくださいました。私のようなものを愛してくださり、お救いくださった主イエス様に心から感謝いたします。

大学時代に知り合った主人と結婚して、三十年ほどになります。主人とは写真のクラブで知り合いました。彼のテーマは『彼方』であり、私のテーマは『時は今』でした。若かった二十代の私は、目の前に見える「今」が大切であり、先の事も心配しない、過ぎ去った事も後悔しない、刹那的な生き方に憧れておりました。「彼方への憧れ」がいつもある主人とは、正反対でした。

彼の作品は、空の写真であったり、虹の写真であったり、海辺の写真でありました。次第に私は、私にはないもの、私が持っていないものを主人の内に感じるようになり、彼の求めている、彼方、本物、真理を、私も知りたいと思うようになりました。本当のことが知りたいと思いました。

神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。
（伝道者　3・11）

あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。
（ヨハネ　8・32）

結婚して、生まれ育った関西を離れて、主人の故郷の長野で暮らすこととなりました。一人目の子どもが生まれてまもなくの頃、我が家に福音が運ばれました。ドイツから、主人の学生時代の親友の方が長野の私たちのところに、訪ねて来られました。留学中のドイツで、ベックさんにお会いして、「救われた」ことを熱心に話してくださいました。その後、数年間、何度も軽井沢バイブルキャンプにお誘いく

ださり、私の知らないうちに、主人は救われていました。「救われる」という意味もわからない私でしたが、「一緒に受けたらどうだ」との主人のことばに押し出されて、初めて行った吉祥寺集会で、初めて見る洗礼の証しのなかで、主人とともに受洗の恵みにあずかりました。主の大きなご愛でつつまれる喜びを知りました。主イエス様からの一方的なあわれみでした。

当時は、長野にはまだ集会がなく、御代田の第一ゲストハウスを建てるために、アメリカの大工さんたちが宿泊していたベックさんのお宅で、礼拝がもたれていました。息子が六歳、娘は三歳でした。私たち家族は、第一ゲストハウスが完成し、そして大規模な基礎工事から福音センターが建て上げられていく様子にワクワクしました。道路事情もまだ悪く、高速道路もありませんでしたから、片道二時間近くの道のりでしたが、毎週、主は礼拝へと導いてくださいました。福音センター献堂式での、数百人の兄弟姉妹との賛美は、私には忘れられない喜びです。一つになる満たされた喜びをいただきました。

シオンの娘よ。喜び歌え。楽しめ。見よ。わたしは来て、あなたのただ中に住む。（ゼカリヤ　2・10）

主にあることの嬉しさをいただいていましたが、罪についてはぼんやりしておりました。その頃のことです。六歳の息子と三歳の娘は「おじいちゃんとおばあちゃんのおうちに遊びに行きたい」とおねだりしました。それには理由がありました。おばあちゃんは欲しい物を何でも買ってくれるからです。「買ってもらいたいから、行きたいの？」と聞きますと、「違うよ。遊びに行きたいだけ」と言います。「買ってもらわないと約束できる？」。「できる」。「お父さんとお母さんとの約束だよ。約束を破ったら、今晩は庭で寝ることになるんだよ」。「絶対に買ってもらわない」と、親子で固い固い約束をしました。ところが、夕方帰って来た二人の様子で、買ってもらったことは明らかでした。問いただしますと、なんと、欲しくて欲しくて、お誕生日までと我慢していた高価なオモチャを買ってもらったことを白状しました。隠し事がばれたとたん、息子は覚悟を決めたのか、庭に出て今夜はここで寝ると横になりました。娘はワーと泣き叫びながら、薄暗いなか、裸足で近所のお友達の家へ逃げました。肌寒い頃でしたから、その晩は、息子は毛布一枚もって物置で一夜を過ごすことになりました。

私は、小さな子どもを一晩外に出した心配よりも、あれほど固い約束をしたにもかかわらず、しかも外に出されるとわかっていたにもかかわらず、約束を破った子どもたちの背信に、打ちのめされ、心が重く、悲しくなりました。

けれども、そのとき私は、主なる神様がこの私をどんな思いで見ておられるのか、痛いほどよくわかったのです。私は今朝、「愛するイエス様」と祈り、「あなた様に信頼します」と祈り、「すべてをあなたにおゆだねします」と祈りました。主は私の心のうちをご存知です。私は簡単に背く者、裏切る者、神様を悲しませる者でした。「イエス様ごめんなさい」

夜があけて、空が明るくなったとたん、ピンポン、ピンポン、ピンポン、「ごめんなさい」。ピンポン、ピンポン、「ごめんなさい。朝になったからおうちに入れて」と息子が玄関のベルを必死で鳴らしました。私は息子がとてもいとおしくなりました。

イエス様も、私が「ごめんなさい」をするとき、いとおしんでくださる、と知りました。

息子は、妹を迎えに行き、二人はお父さんにお尻をぶたれました。そして、四人でお祈りをしました。

私たちのわがままのためにイエス様が身代わりとなって十字架についてくださったこと、「ごめんなさい」をするときに主はゆたかに赦してくださることに感謝しました。家族のまんなかに主がいてくださるとはなんと幸せなことでしょう。

夏が過ぎると、御代田集会は小さな集いになりましたが、礼拝でいただくみことばは、喜びとなりました。家族四人そろって、毎週休むことなく集うことができたのは、ほんとうに恵みでした。

私ひとりでは、決して知ることのできなかった自分のほんとうの姿を、家族の交わりをとおして、主は教えてくださいました。日々の家庭生活のなかで、私自身が罪のかたまりであることを、主は私に示してくださいました。

ある晩、私は家族のことで苛立ち不機嫌でした。文句を主人にぶつけました。主人が「おまえの心は氷のようだ」と言ったとき、私は「そのとおりだ」と思いました。確かに私の心は氷のようでした。ほんやりしている私に、はっきりと主イエス様は、私の氷のように冷たい心、絶対に許したくない、かたくなな醜い心を示されました。私の心のうちに、自分ではどうすることもできない暗黒があることを知ったとき、この私がイエス様を十字架につけたと知りました。初めての心の底からの悔改めでした。悔改めの恵みを主イエス様がくださいました。静かな喜びと平安で満たされました。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

（ガラテヤ　2・20）

それから二十年あまりが過ぎましたが、何度も何度も同じ事をくり返してきた私たち家族です。こんな私を主は本当に受け入れてくださるのだろうか、こんなに不真実な私が赦されていいのだろうか、と底知れぬ不安がおそうとき、主は出エジプト記12章から次のみことばを私たちに示してくださいました。

イスラエルの全会衆に告げて言え。この月の十日に、おのおのその父祖の家ごとに、羊一頭を、すなわち、家族ごとに羊一頭を用意しなさい。あなたがたの羊は傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。あなたがたはこの月の十四日までそれをよく見守る。そしてイスラエルの民の全集会は集まって、夕暮れにそれをほふり、その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と、かもいに、それをつける。その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人をはじめ、家畜に至るまで、エジプトの地のすべての初子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下そう。わたしは主である。あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。

（出エジプト　12・3、5～7、12～13）

主なる神様は、かもいに塗られている血を見て、初子を打つというわざわいを過ぎ越されました。神様は家の中にいる人が、良い人か悪い人かをごらんにならずに、かもいに塗られている血を見て過ぎ越してくださいました。

私は、私たちの罪のために身代わりとなって十字架についてくださったイエス様の流された血を見て、主なる神様が過ぎ越してくださることを知りました。私がどんなに悪い、どうしようもない者であっても、主なる神様はそれをごらんにならずに、イエス様の

流された血を見て、過ぎ越してくださいます。私が、十字架で血を流されたイエス様に感謝するとき、へりくだってイエス様の十字架に感謝するとき、主なる神様は私の罪を赦してくださることをはっきりと知りました。救いのゆるがない確信を私はいただきました。

私たちは真実でなくても、彼（イエス様）は常に真実である。（2テモテ　2・13）

確信をいただいてもなお、目に見えるところ、耳に聞こえるところですぐに心にトゲがささります。自分の力でそのトゲを抜くことはできませんが、自分を見るのではなく、イエス様の十字架を見上げるとき、私の心は自由になります。イエス様がまんなかにいてくださるとき、私たちの交わりは喜びがあり、許せない私の心も主が自由にしてくださることを私は知りました。

神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。（1コリント　1・9）

私は福音センターで、たくさんの恵みをいただいてきました。いつでもセンターに来ることができ、御代田キャンプに毎回、参加できたことは、主からの大きな恵みでした。

主のご栄光をたくさん見せていただきました。「主は素晴らしい」と兄弟姉妹とともに叫ぶ喜びをいただきました。兄弟姉妹と心ひとつにして祈る喜びをいただきました。主が豊かに働かれることに、目を見張りました。けれども、主がこれほど豊かに恵みを降りそそぎ続けてくださったのに、私は主の恵みをザルのように、とりこぼしてきた愚か者です。それは、恵みに鈍感になって、恵みを受けても受けなくても変わりのないような者になっていたからです。

私は軽井沢の小さな礼拝を思い起こします。あの頃は、メッセージを語ってくださる兄弟もおいでにならず、礼拝だけの集会で、参加者も数人でしたが、私にはかけがえのない主にある交わりが与えられたのです。それが、センターが建ち、全国の方々が集う大人数のキャンプが次々にもたれるようになると、私の心は、落ち着かなくなりました。次のみことばが示されました。

しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。（ルカ　10・42）

このみことばをいただき、悔い改めました。

これからは、主イエス様がくださる恵みを一滴もこぼすことなくいただく毎日でありたい、と願います。ロングキャンプも何回も開かれるようになりました。主の恵みの道を生きることができ、主のご栄光を豊かに知ることができますように、祈っていきたいと思います。

あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。（詩篇　81・10）

長岡　伊津子
一九五五年　大阪府生まれ
高松小、和歌山大学付属中、桐蔭高校、神戸女子薬科大学卒業
大丸合成薬品株式会社　管理薬剤師

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15 〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33 〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

集会の出版物

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ



ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ（上・下巻）



ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと－ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。

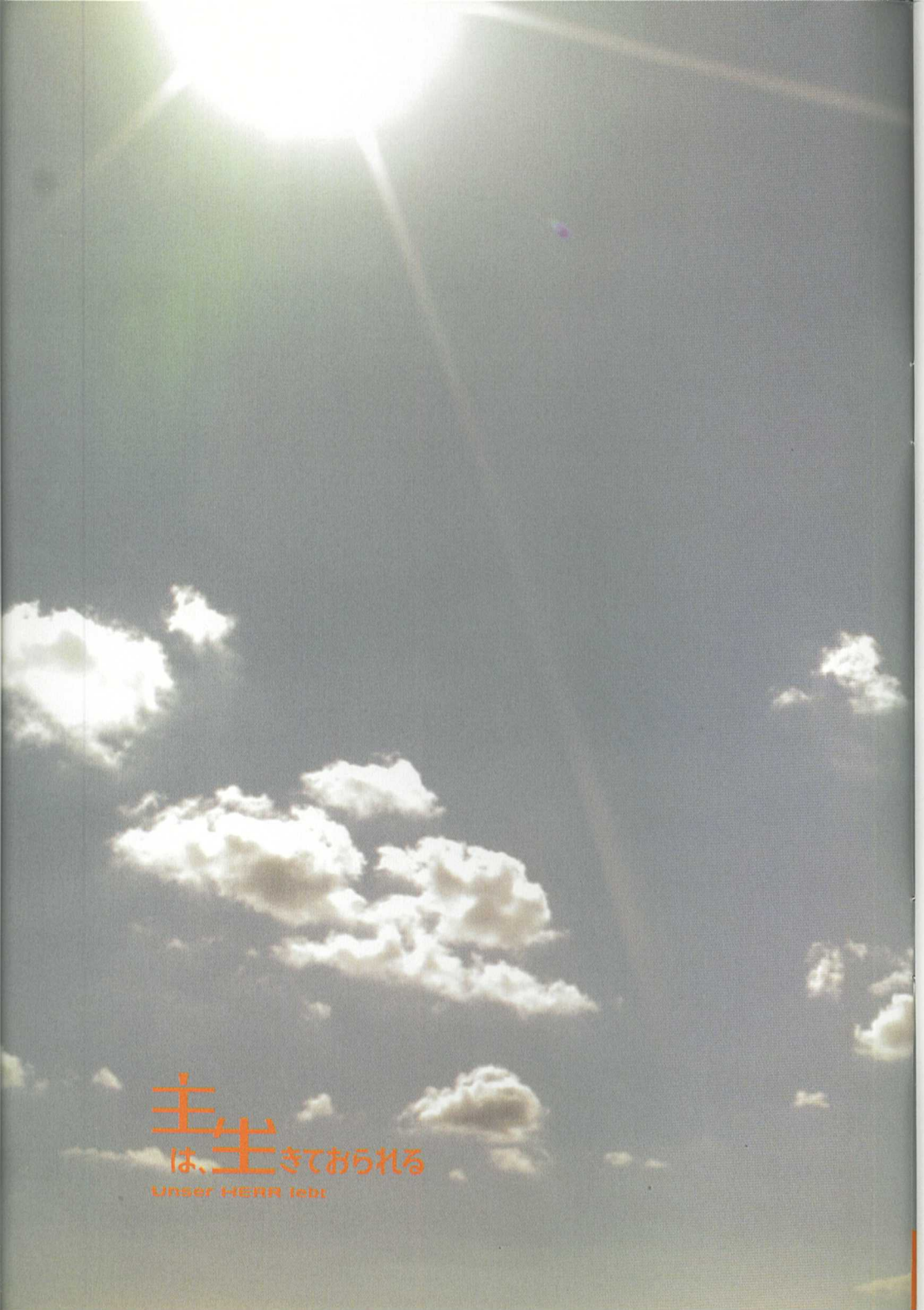


光よあれ －私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を送料のみで配付しています。
お気軽にお申し込みください。



Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第24号

2012年4月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
イラスト	向井則博
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。